

会報

1990.4~1991.3

平成2年度

29

日本大学山岳部
桜門山岳会

会報 第29号

— 目 次 —

巻頭言 思い出すままに	平山善吉	1
暴虎馮河	沼尻正隆	4
平成2年度 日大山岳部活動報告	山本茂久	5
平成2年度 桜門山岳会活動報告	中嶋啓	23
寄稿		
folkローレを聴きながら	山本修	25
マカルーと“山の神”	岡田貞夫	33
追悼		
森田博正君を憶う	村石幸彦	35
故 藤田達夫さんを偲んで	田中昇	36
初見一雄先輩	石坂昭二郎	37
窪田先生を偲ぶ	芝田稔	41
相良先生を偲ぶ	津村利男	42
登山計画の近況		
1. パミール登山隊1991—行動報告—	中村進	44
2. チョー・オユー峰登山隊1991		45
3. マカルー登山隊1992		46
編集後記		47



▲春山合宿 剣岳山頂

巻頭言

思い出すままに

—— 部長就任にかえて ——

日本大学山岳部部长 平山善吉

沼尻先生の後を受けて、この度、山岳部の部長を引き受けることになった。日本大学山岳部を卒業して35年、私が接し、そして教えを受けた部長には瀬能先生、清田先生、そして前部長の沼尻先生がおられる。感無量である。瀬能先生は、私の学生時代から南極、ヒマラヤへ最も充実した放浪の時代の部長として、その思い出は特に多い。また、清田先生は、我が山岳部の誇る大先輩、初見さんの同時代の岳人として当時上高地で活躍された東大山岳部のOBである。東大山岳部の方々からその高名を聞き、何度かお話をする機会を得、山岳部の部長として推薦した経緯があり懐かしい。しかし、残念なことに、ご両名ともすでに他界され、今はない。悲しいことである。

そして前部長の沼尻先生は、ご高名な中国文学者で副総長・文理学部部長として大学の要職にもおられ、何よりも瀬能先生の愛弟子でもあられた。奇縁といおうか、以来10年もの永きに亘りいろいろご指導を賜りご苦勞をおかけしてしまった。これらの方々の後を受けての山岳部の部長である。月並みの言葉ではあるが、正に責任の重さを感じざるをえない。

この機会に、私の約40年に亘る山岳部から始まった生活の一端を振り返ってみることにしようと思う。高校時代、サッカー選手としての生活から決別し、まともな学生生活を送りたいと、今でいう推薦入学を断わり日本大学建築学科へ入学した。これは終戦の痛手から我が国がやっと抜け出した昭和27年の春である。それがどういうわけか、入学と同時に山岳部へ入ってしまったのである。春山から帰ったばかりの、真っ黒に日焼けした上級生の勧誘に、受験勉強では味わうことの出来なかった新鮮な魅力と、野性に引かれ、また、たまたまこの時に席を同じくした後藤君（現、東京都住宅供給公社）の山の話に騙

されたのである。彼の、『山岳部に入るために日大に入った』と言うのに比べ、私は中学3年の時、初めて家族で登った富士山が唯一の山との出逢いだったのである。

この頃の学生山岳部は、早稲田、慶応を筆頭に、それに日大が加わり、これらを中心に動いていたように思えた。そして少なくとも私はそのように信じていた。当然山岳部には、その誇りというようなものがあり、活気に満ち溢れていた。

後藤君の他に山岳部に憧れて何人かの人達が日大に入った。私と生涯の友となる大鷲君もその一人である。当時の山岳部には、冒頭に述べた初見さんを始め神山、金坂さんなどの大先輩に加え、後にマナスルの遠征に参加した千谷、石坂、松田さん達が毎日のように部室に顔を出され、後輩を指導していた。私の時の新入部員は40名近くを数え、上級生も20名以上もいたのではなかったろうか。三崎町の法学部の教室では収容しきれず、準備会は教室を借りて行っていた。また、当時は山岳部ということで級友や先生の情も厚く、授業には殆ど出なくても、単位をもらうことが出来た。同じクラスには、アメリカン・フットボール、柔道、空手、ボクシングなどの選手がいて、クラスはこれらの運動部の仲間達が幅をきかせていた。また、三崎町あたりでも、あのナーゲルのバッチが、かなり物をいって大きな顔をして歩けた時代でもあった。正に良き時代だったのである。

また、山岳部の生活は大変ストイックでもあった。タバコも酒もあまりやる者もなく、特に酒に関しては、今の学生のようなバカな飲み方はしなかった。自宅から部室へ、部室から授業に、そしてまた部室に寄って家に帰る。毎日10時過ぎ頃までいたろうか。こんな日課に加え、山へ行かない日曜日は世田谷の

キャンパス(現、文理学部校舎)でトレーニングに励んだものである。教室では誰言うことなく『山岳部・建築科』と言われるようになり、いささかこれを誇りに思っていた。

山岳部の学生は、『真面目である。そして頭が良い。』これは、その頃の瀬能部長の口癖であった。先生は単位のとれない部員のために本気で心配し、ご苦労して下さいました。頭の下がる思いである。後に私が直接ご指導を仰ぐことになった建築教室の村内明先生(現、理工学部教授)は当時世田谷へ図学を教えに行き、瀬能先生の薫陶を受けた一人でもある。先生は、先の言葉を今でも信じておられるふうで、後に私が理工学部の山岳部部長をお願いした時も、山岳部ならと快くお引き受け下さったのである。

山岳部での生活は、新入生歓迎のための入笠山での天幕懇親会から始まり、そこで初めてお互いの顔合わせが行なわれた。身の回りの物だけを持って参加し、キャンプ・ファイヤーを囲んだときの楽しさも束の間、初夏の横尾の合宿では、みんなと同じ荷物を背負わされ、死にものぐるいで登った徳本峠、そしてそこから見た残雪の穂高、すべてが初めての、そしてあまりにも強烈な印象は、今でも忘れることは出来ない。合宿のあとの槍から千丈沢に下る縦走の時、槍の肩から燃えしきる槍沢小屋を見、これが後に大きな騒ぎになろうとは知る由もなかった。

このあと三ツ峠の岩登り訓練では、冷たい岩肌に興奮し、何しろ毎日が初めて体験する事ばかりであった。そして夏の剣沢の合宿と縦走、それは三田平での日大の合宿で劔の山開きが始まると言われ、テントは30張り近くも張られた。そして夏休みが終わり、秋の訪れをきくと、多くの先輩の参加を得て、日光、光徳沼で天幕懇親会が催された。楽しい一時であった。このあと秋山、富士山、冬山、そして春山と一年間はまたたく間に過ぎてしまった。楽しい思い出は尽きない。

しかし、毎日の厳しいトレーニングと山行のためか、多くの新入生がやめて2年になるときは、も

う大鷲君と田中君と私の3人だけになってしまっていた。今、考えてみた時、当時はそんなに厳しい生活だったのだろうか。たしかに山行には、シゴキがあったと思う。これは、当時の山岳部が『未知なるより高き頂』を求めるために自ら求めた『より困難』な山行であり、私はこれが学生登山の基礎であると信じていた。大学での4年間はこのような山行を重ね、その生活を満喫した。

日大山岳部には5大厳守事項というのがあった。最初は、『先輩、後輩の分を明らかにすべし』から始まるもので、私は今でもこれは山岳部の美風であり、伝統であると信じている。今ではこれがどうなっているのだろうか。また、山岳部には他にない素晴らしい歴史があり、その伝統の中で先輩の教えを守り、その美風を後輩に伝えていくのが日大山岳部の若いOBや、学生の部員としての責任だと思う。そして次に『リーダーの命令に絶対服従の事』という当然の事項があった。学生山岳部はいかなる理由があろうとも遭難してはいけないのだ、そのために『リーダーの……』ということであり、日常的なマナーもこれ等を基本に教えられた。日大山岳部は、このように多くの先輩によって、その精神が築かれ、守られ、そして育てられてきたのである。時移り、考え方が変わっても、その理念こそ日大山岳部なのであると私は信じたい。

山へ行かないルームでの生活、これはほとんどが次の合宿の準備とトレーニングに費やされ、それ以外の時間は、喫茶店で山の話に終始し、あるいは部室での読書を楽しんだ。当時、山岳部の部室にはいわゆる山の古典といわれる図書が沢山あった。ウインスロープ・ヤングの『マウンテン・クラフト』やティルマンやシプトンのヒマラヤに関するものなどに加え、楨さんの『山行』や、辻村さんの『スイス日記』、大島さんの『山、一研究と随筆』、それに早稲田、慶応や一ツ橋の『リックサク』、『登高行』、『針葉樹』などの部報である。『山へ行かないときは本を読み』これも日大山岳部における先輩の良き教えの一つだったと思う。多くの仲間がやめ

ていく中で、山岳部は精鋭的な山登りだけの集団でよいのかという論議も交わされ、その結果『山の好きな人なら誰でも良い』ではないかという考え方が、『包容力』などという言葉とともに定着しつつもあった。しかし、これが次々と起こる遭難の前兆だったのだろうか。何しろ私の学生時代はいくつかの遭難を記録しながら、栄光の山岳部から苦難の時代へとむかっていったのである。

私達の1年の冬の穂高では、平林、小金井両先輩が事故に見舞われ、この時、自分でも放心したような気持ちになったのを覚えている。私達が2年になった時、上級生は梅松、安田両先輩だけになってしまった。そしてその年の初冬の富士山では、8人も多くの仲間を一瞬にして失ってしまったのである。梅松さんをはじめとする、上田、石井、塚本、高野、細川、小松、近沢君達である。このあまりにも悲しい事実を表現する言葉を知らない。ただただ残念でならない。

また、このあと卒業した年の夏山では高橋計介君を剣で失い、南極へ行った留守中には冬の穂高で菊池と中村の両君を失ってしまった。そして、スキーの事故とはいえ谷川で後輩の榎田君を失ってしまった。残念であると同時にまさに悲しみの極みである。

山岳部の部室には、先の5大厳守事項の他に、その4分の1位の大きさに当時の瀬能部長の筆になる『細心にして大胆であれ』という銘筆が掲げられていた。先生は白陽と号し、書を得意とされた。私達は合宿の前には必ず堀の内の先生のお宅へおじゃまし、山行計画を説明するのが常であり、また帰京の報告もした。先生はいつも我々の話を熱心に聞かれ、そのあと酒肴でもてなして下さった。先の細心にして大胆の言葉は、この時必ず出る論議で、準備と行動は最悪の状態を想定し、細心の注意が必要であるが、一旦、事が決まった時には断固たる決心をし、これを実行しなければならない、というのが先生の持論だったように思える。

しかし相次ぐ遭難に、先生は先の書を『細心にし

て細心であれ』と書きあらためられたのである。本来山岳部の使命である『より困難な山行とパイオニア精神』も、富士山以来、先生に聞いてもらうことも出来なかったし、そんな話をする余裕もなかった。先生には、いかにご心労を煩わされたことか、当時を知る人もわずかになってしまった。

我が山岳部は、日本大学体育会（現、保健体育審議会）の傘下であり、たび重なる遭難で、大学当局からの叱責と、目前の事実からの逃避として話し合われたAC（英国山岳会）の理想の姿に共鳴し、体育会からの離別が議論されたこともあったが、今ではそれがどのように理解されているのだろうか。多くの尊い犠牲を払いながら山岳部はますます小さくなったとき、その犠牲は教訓とし得たのであろうか。また、かつての『シゴキ』は、今どのように理解されているのだろうか。困難と苦しみの評価はどうなっているのだろうか。

私は誰よりも山岳部を理解し、誰よりも愛しているつもりである。そして何よりも山岳部が好きである。いや、あったと言った方が的確なのかも知れない。学生時代とそれに続く、情熱の時代から、私の山岳部に対する心の灯火は、今かすかな残燈となりつつある。そしてほぼ25年のブランクの後に、再び山岳部のことを考える環境に引きもどされたのである。そして、かつて最も住み慣れた山岳部の空気を吸った時、それがいかに希薄なものか、私達の時代の山岳部は遠いところへ行ってしまったようである。若干の空しさを感じるのは私だけなのだろうか。

ただ、いかなる理由があるにせよ、部長をお引き受けした今、かつて我々が経験したルームの生活を思い出し、そして多くの先輩や友人からのご指導とご協力をいただきながら、全力をあげてその職責を果たしたいと思う。日大山岳部は強く、そして大きく翔き、かつ事故を起こしてはならないという矛盾を克服し永遠でなければならないと思っている。そしてまた、桜門山岳会も楽しく活性化することを祈りたい。

暴虎馮河（虎を暴ち河を馮る）

前部長 沼尻 正隆

私は昨年6月に定年を迎え専任職を退くことにもなっており、昭和55年7月以来委嘱をうけていた日本大学山岳部長を退任した。後任には、初めて山岳部OBから平山善吉氏を迎えることができたことは何よりもご同慶の至りである。その間10年の長きにわたって何かにつけ絶大なご支援、ご助力をいただいた桜門山岳会の戸村会長をはじめ各位に対し、ここに改めて厚くお礼を申し上げる次第である。

私は、これといった山行経歴もなく、光栄あるわが山岳部の部長という重職を担うには全く不適格であったが、ただかつての瀬能部長との深い関係によって、あえてお引受けしてきたのであった。その間、部員相互の努力で大きな事故もなく終わったことは幸いであったが、何よりも心にかかったことは、現役部員の減少であった。現在はOB各位のご尽力や部員、監督の努力で再び部員も増加し隆盛を見るようになり何より安堵されたが、山岳部と桜門山岳部の総会の席で毎年現役部員の少ないことは、何とも出席されたOBの諸君にも申し訳けない気持ちで一杯であった。

部員の減少は、ひとり本学ばかりの問題ではなく、他大学山岳部でも大きな課題であるが、伝統ある山岳部の歴史を継承するためには、これは何よりも由々しい問題であった。今の学生は山に対する興味を少しも持っていないのだろうか。どこにその原因があるのかを確かめてみると、山岳部というと何か訓練が厳しくてしごかれるのではないかと恐れられるのである。それよりも同好会のようなクラブであれば気楽に楽しめるという今様の若者気風から敬遠されているようである。それ故どの大学でも気楽な山登りの同好会のようなクラブが数多くあるのである。しかし、ある程度以上の高い山岳登攀は、物見遊山と違って高度な訓練と技術の習得が必要である。そ

れは場合によっては厳しい自然との対決が直接生命の危険に結びつくからである。よく大学の同好会などで全く無装備で谷川岳などに行って事故を起こすのは、そのような不用意に基づくものであろう。

最近は登山も国内ばかりでなく、国外に出ていくことも多くなってきたが、それだけに情報の蒐集や現地の調査はまた欠かすことのできない重要性をもつものである。最近、これは登山ではないが某大学の学生がパキスタンのインダス川下り中に武装強盗団に誘拐され身代金目当てに1ヶ月以上も抑留された事件があったが、治安の悪さを事前に聞いていながら強行したことは、当人が告白するように判断が甘く無謀であった。これは人災ではあるが、つねに危険を伴う自然との対決を強いられる山岳登攀も、厳しい状況の判断選択と用意の周到慎重さは何よりも大切であらう。安易な功名を求める軽率さや自己過信はもっとも危険といわなければならない。

孔子は勇を誇示する弟子の子路に対して、「暴虎馮河して死して悔いなき者は、吾れ与にせざるなり。必ずや事に臨みて懼れ、謀を好みて成さん者なり。」（論語、述而）といっている。暴虎馮河とは、虎に素手で立ち向ったり、黄河を歩いて渡ったりして、死んでもかまわないというような無鉄砲な行ないをいうのである。孔子は自分が一緒に行動するものは、事に当って慎重で、よく計画を練って成しとげる人物であるというのである。

わが山岳部も何よりも生命の安全を第一の鉄則としてあげている。山岳部はただ山頂をきわめるといふばかりでなく、厳しい自然の中で深い人生の叡知を学ぶことでもあるのである。

わが山岳部と桜門山岳会の栄光ある伝統が若い世代によって引継がれ、いよいよ発展してゆくことを心から祈ってやまない次第である。

活動報告

平成2年度（1990年4月～1991年3月）

部長 沼尻正隆／平山善吉
 監督 高緑繁伸
 コーチ 古野淳
 主将 山本茂久

部員 4年 菊谷兼一朗
 3年 CL山本茂久 SL渡辺勇一
 田端宏好 下村忠幸 野本修
 勝又篤 家口寛
 2年 伊藤英彦 平井伸明 田山将
 1年 梅田義一 大野敦史 谷朝久
 山田哲史 岩下誠 日本修
 大越壮一郎

部室 〒156 東京都世田谷区八幡山2-10-2

——平成2年度活動報告——

チーフリーダー 山本茂久

平成元年の春山合宿は、ヒマラヤ・アイランドピークと北海道・中央高地の2つの計画を同時に合宿として出すという形になった。そして、ヒマラヤ隊は前CLの菊谷さんがリーダーをとり、北海道隊は新CLの私がリーダーをとるという変則的な事になったが、この合宿によってスムーズにリーダー交替が成されたと思う。その春山合宿は両隊とも成功を収め、4月上旬、再び全員が顔を合わせることが出来た。この日から平成2年度の新規リーダー会の実質的な活動が始まったわけであるが、活動を始めるに当たって、ヒマラヤ隊のメンバーと北海道隊のメンバーが何のわだかまりも無く、これまでの様にやっていけるかが心配であった。しかし、実際にはすぐに打ち解け、それぞれが身につけた実力を早く発揮したいというような活気に満ち溢れるようになった。

リーダー会は早速今年度の目標を決定することにした。これはリーダー陣の多くがかねてから考えていた「春山合宿での黒部横断」に自然に決まっていた。そして、

そのために、この1年間は春山の計画を主として動くこと、1年生には例年以上の基礎技術の充実を計ること、冬山は春山のためのトレーニング的な山行にすることは、などを決めた。このようなことまで決めてしまうことは、ここ1、2年間の自由になんでも出来そうな雰囲気崩し、締め付けの多い活動になってしまいそうであるが、このような中でいかに自由な雰囲気を保ち、各人のやる気を引き出せるかが、リーダー会の力量を問われる所であると思った。また、全メンバーが出来る限り無理なく参加できる計画を1年間みんなで暖め続け、そして実行したときの感動を味わうためには、ある程度必要なものでもあった。

このような活気づいた雰囲気の中で新人勧誘を行ない、復帰した大越を含めて8人の新入部員を確保した。

5月山行は春山合宿の偵察という意味を含めて、全パーティー黒部周辺に展開した。よく春山合宿が成功した後の5月山行は事故が起き易いといわれるが、今回も案の定、1パーティーが何でも無い所で怪我をして敗退してしまった。しかし、他の3パーティーは無事計画を遂行し、リーダー陣はそれぞれ積雪期の後立山、黒部、剣がどのようなものかを実感し、貴重な体験をして戻ってきた。

初夏合宿は、1年生を早期に育て上げなければいけないという考えから、雪訓2日、分散登攀3日という日程を組んで気合いを入れて望んだが、雨にたたられ、結局雪訓1日、分散登攀1日になってしまった。また分散登攀では、かねてから考えていた屏風岩へ1パーティーを出したが、雪渓が残るこの時期は、アプローチと下降に運動靴では非常に時間がかかってしまい、帰幕が夜になってしまった。合宿形態の中では登る事だけに全てを優先できず、この中で行なうことの難しさを実感した。

今回は、春山以来気管支を患っている下村と、富士山の事故以来4カ月間の入院をやっと終えた平井が、無理を押してBCキーパーのために入山した。2人共つらいのを我慢してよくフォローしてくれたと思う。

夏山合宿は、例年通り内蔵ノ助谷左俣定着で行なった。今年は人数が多いので、分散登攀において「剣ロングを出すこと」「立山東面の全てのルートをとレースすること」「更にそれぞれのルート図を作成すること」を目標

の1つとして考えた。入山は例年通りの薬師、大日、ポッカのルートに加えて久しぶりに針ノ木峠越えを行なったのだが、針ノ木谷の道の崩壊が激しく、辛い入山ルートであった。

定着合宿は連日の好天に恵まれ、雪訓3日、分散登攀4日をこなした。雪訓は充分に行ない、満足な結果を得た。分散登攀では、剣ロングとして源治郎尾根へ1パーティー出したのだが、2日間ではBCには帰れず、計画の甘さがでてしまった。立山東面の方はほぼ全ての既成ルートをトレースし、目的を果たしたものの、ルート図に関しては、下山後慌ただしかったことと、1回登っただけではよく分からないことなどの理由から来年回しになってしまった。

今回の合宿は、入山、定着あわせて12日間晴天が続き、スムーズにスケジュールをこなしていくことが出来た。しかし、今年はBCに雪渓が残っていなかったために非常に暑く、休養をとっても体が休まらないようで、持久的な体力を多く必要とした。このような中で、だらける事なく充実した合宿を行なえた事は良いことであった。

後半分散とその後の個人山行を行なうに当たって、リーダー会では、「2年以上の部員は必ず1度は下ノ廊下を歩くこと」を決めた。これは、黒部の谷間を歩いてみて、黒部横断のポイントを検討する材料にするためであった。この事から後半分散も黒部川を中心に展開していた。個人山行では、昨年よりもステップアップしたレベルの計画が多く出たが、どのパーティーも事故無く成功させて帰ってきた。

後期に入ってリーダー会では冬山と春山のルート決定を行なった。秋山はこれに基づいて全ルートの偵察とデポの荷上げを行なった。

富士山合宿は、例年の吉田口から御殿場口へ定着場所を移して行なった。富士山・吉田口での厳しい雪訓の必要性と危険性に関しては過去幾度となく議論が交わされてきたわけであるが、昨年、吉田口で骨折事故を起こしてしまった私達は、早急に具体的な答えを出さねばならなかった。結局「雪訓場所を滑落事故の危険性の無い斜面にする」「雪訓の内容を限定し、アイゼン歩行とザイルワークの確認程度にとどめる」ということにして安全性重視で望んだ。実際の富士山・御殿場口は異常な程雪が少なく、入山初日の幕営地・六合五勺には雪が無かった。更にその晩は台風並の強風が吹き、飛んで来る石粒のために1晩で冬用テント3張がズタズタになってしまった。応急の修復が不可能なこと、天候が悪いことなどから翌朝撤退を決め、富士山合宿はアイゼンを1回も履

けないまま失敗に終わってしまった。下山後は冬山合宿まで2週間しか無いために、大慌てでテントの修理、冬山のメンバー変更、その他の対応に取り組み、何とか冬山合宿の出発にこぎつける事が出来た。

冬山合宿の計画は、当初より春山合宿の訓練的な意味から「豪雪に慣れ、体力をつける」「長期山行を行ない、精神的に鍛える」などをポイントとして考えていた。そのような中で、私達の頭の中には、かつてから「いつかは」と思っていた「越後」が浮かんできた。今なら出来るかも知れないという思いが、次第に活気を産み出し、消極的に考えていた冬山合宿を勢いづいたものにしていった。計画は、これだけの人数をより効果的に動かすために3パーティーに分け、最後に合流する形式を取った。ルートは、アイゼン歩行を経験していない大部分の1年生を確実に登頂させるルート、大学山岳部としてはオーソドックスなルート、技術的、体力的に困難であるが記録性のあるルート、と色合いの違う3つのルートにした。結果は、駒ガ岳、三山縦走の2パーティーは成功したが、荒沢岳パーティーは悪天と前山の困難さに阻まれ、時間切れの敗退を余儀なくされた。今回は、久しぶりの豪雪、悪天に見舞われ、各パーティーとも同様の苦戦を強いられた。その中で学び取り、身につけたものは非常に多かったように思う。結果的には春山合宿へのステップとして重要な山行になった。また、合流という大きな目標が果せなかったことから「春山合宿では必ず」の思いが部全体に広がり、活気づいていったように思う。また、この合宿を最後に菊谷さんが引退することになり、リーダー会は3年生だけになった。

2月山行は、まだアイゼンを履いていない1年生が多いことから、合宿形態にしてのんびり歩き、実地で諸技術を教えることにした。場所を中央アルプスに定め、少しでも面白味のある山行をしたいという考えから記録の無い三ノ沢岳・独標尾根を選んだ。しかし、ここでも思わぬ所で苦戦を強いられ、主稜線に出るまでに予想外の日数をかけてしまった。更に、最終日の宝剣岳のフィックス通過時に3年生の殆どが凍傷になってしまった。これは自信をつけてきた上級生の傲慢さと山に対する甘さが露呈してしまったように思う。結局、これがもともと田端が春山合宿に参加出来なくなってしまうという犠牲を払ったが、この件でリーダー会は緩みかけていた緊張感を取り戻し、より厳しい覚悟で春山合宿に取り組むことになった。

春山合宿の計画は、1年間暖め続け、様々な検討を行ってきた。ルートは、黒部横断と同等の困難性を持ち、

理想的な形で横断パーティーと合流できる赤谷尾根パーティーと、最も自然で、かつ安全に横断が果せる、鹿島槍～S字峽～剣のルートを取る黒部横断パーティーの2ルートで行なうこととした。準備は万全であったが、直前になって、田端と伊藤が参加出来なくなってしまった。上級生2名が欠けては計画の実行が無理になるのだが、山本(修)OBと菊谷さんが参加して下さることとなり、なんとか出発できることになった。入山後は両隊とも比較的天候に恵まれ、3月24日、とうとう仙人山で合流できた。その後は総勢13人の大部隊で確実に進み、無事下山することが出来た。

今年度1年間はまさに黒部に始まり黒部に終わるという感じであった。リーダー陣の勢いだけで強引に走り抜けてきた感があり、ここ1、2年と比べると自由な山行が少なく、合宿も内容の濃いものが多かった。このような中で1年生は良くやってきたと思う。また、冬山、春山の計画は直前になってパタパタすることがあったが、それでも実行にこぎつけられたのは、僕らの計画を常にバックアップしてくれたコーチ会のおかげであると思う。

今年の冬山、春山の計画は、僕らが1年生の時と比べるとかなりレベルアップした計画であったと思うが、結局、過去の計画のコピーに終わっているように思う。更に過去の計画に比べ、壮大さ、困難さの点で大きく劣っているように思う。これからは、更に力量を上げることと共に、かつてのリーダー達がやってきた、自分達のオリジナルの計画、他の誰も考えないような素晴らしい計画を考えていかなければならないだろう。

また、今年度の活動の中で忘れてはならないのが平井のがんばりである。退院直後、ボルトの入った不自由な足で、初夏、夏とBCまで入り、BCキーパーに徹して後輩の面倒をよく見ていた。そしてとうとう冬山合宿にも気合で参加した。平井の1年間の活動は、今後も怪我を負った後輩達の良き指標にもなると思う。

——平成2年度コーチ会報告——

ヘッドコーチ 古野 淳

日本の経済は依然強く安定し、今年の初夏合宿前に大部分の4年生の就職が決まってしまう。昨年8名入部した新入生は1名を欠いたのみで、大きく育っております。

部員の増加は合宿計画の意欲に顕著にあらわれ、冬の越後と春の黒部横断+北方稜線を成功させるにいたりま

した。部員減少による山岳部の危機を経験してあらためて思うのは、人数が少なれば少ないながらも社会人山岳会的な困難性を持たせた計画もできるだろうと考えるのはあさはかであって、学生は4年で卒業してしまうという宿命を背負っている以上、力量はソフトの部分（リーダー会/コーチ会）でしか蓄積できない事情があり、部員の増加と総合的な力量とは相関関係が大いにあるということです。今後、現在の4年生部員が卒業した後の事を考えれば、新入生はあと5人ほど欲しかったところですが、そう贅沢ばかり言っていられないでしょう。そう考えると実働25名ぐらいの規模がベストだと思います。

積雪期以外の合宿については余裕をもたせた日程で、訓練合宿の意義にこだわることなく、もっと山そのものを楽しめるような計画をたてるよう指導していきたいと思えます。要は結果的に冬山までに基本技術と基礎体力を養成すれば良いわけで、他大学でいまだに行われている不合理な「精神鍛練」は必要がないと言い切れます。これはコーチの立場から指導する必要があります。「もっと山を楽しめばよいのに」言うは易し、我々コーチがもっと声をかけあって山行きを続けることが大切だと思います。世界的にヒマラヤ登山は大衆化の時代をむかえつつあるようです。涉外や金銭的には昔と比べ物にならないほどヒマラヤは近くなっています。無酸素、アルパインスタイル、ソロといったハイレベルのヒマラヤ登山は、一部のクライマー達には試みられていますが、かつて生死をさまよって、ヒマラヤの一時代を築いた世界のクライマー達は、それぞれの祖国で環境問題等、新たな活動に取り組んでいる人が少なくありません。登山の価値観が多様化したというよりは目標を見失った結果だと思います。しかしヒマラヤが近くなったといっても、個々にとっては大きな代償を払うことには変わりありません。代償を払ってもその登山をやる価値のあることは私を含め、多くの先輩方が理解されています。学生やOBのヒマラヤ登山がもっともっとさかんになることを望んでおります。

そんな現在の環境の中、第2回目の学生ヒマラヤ登山も計画がなされております。昨年、学生が自ら春山合宿の一環として計画したアイランドピークは、我々の心配をよそにとも自然に登ってそして帰国しました。帰国後の彼らの反応には、普段の合宿となんら変わらない会話が次々とでてきます。つまり、学生にとってのヒマラヤはもはや山岳部活動の延長上にあるのではなく、そのものであります。学生がヒマラヤ登山に参加することは他の大学においても日常化しています。しかし我々の山

行は合宿として計画し、遂行したことに意味があり、今後も学生の登山の本質を踏まえた上で、今後、学生のより視野の広い登山活動を育てていく意味でも、2～3年に一度は実行したいものであります。

海外合宿については、学生やコーチの頭にはいつでも飛び出せるよう、積極的に準備をしていくつもりですが、我々の登山の基本はあくまでも初夏の穂高、夏の内蔵ノ助、初冬の富士山、そして世界に類をみない豪雪の冬山で経験を積んでいくことだと思います。時代が移り、ヒマラヤの価値観が急速に変わっても、日本の自然環境の厳しさはなんら変わっていません。せっかく縁があって集まった若い仲間ですから、彼らのエネルギーを精一杯燃焼させ得ることのできるより良い環境を作っていくと思います。

何分にも未熟な我々ですが、平成3年度もせいっぱい頑張りたいと張り切っておりますので、先輩方のご指導、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

記 録

■五月山行

1. 赤谷尾根～剣岳

期 日 4月29日～5月3日

メンバー L渡辺、野本

入山はラッキョウの粒程の大雨となり、おまけに雷まで鳴る中の藪漕ぎとなった。初日は1,000mの所で幕営してしまいましたが、翌日は赤谷山までいくことができた。ここで、後から来た社会人2パーティーに追い付かれてしまったが、ザイルを出さない彼らは速いに決まっている。午後になると雪質が悪くなり、下降には時間を食う。結局、窓から窓へとジリジリ進んで行くことにした。晴天に恵まれ、スムーズに進み、あっと言う間に小窓の頭まで来た。ここまで来ると、はるか北方稜線が自分の足から伸びて見えるのが美しい。小窓王南壁のトラバースは、池ノ谷が「いらっしゃい」と口を開けて待っている。嫌な所だ。後は内蔵ノ助のゴルジュのような池ノ谷ガリをつめ、春の太陽を燦々と受け、冬より遙かにせまくなったピークに立つ。

2. 不帰I峰尾根～餓鬼尾根下降

期 日 5月1日～5日

メンバー L菊谷、家口、下村

来年の春の黒部横断に備えることもあって、不帰I峰のバリエーションと、餓鬼尾根という半横断の計画を行なった。入山はゴンドラとリフトを乗り継いで唐松山荘まで行き、八方尾根からラッセルを繰り返して、唐松沢まで下っていく。沢筋ではコンテで川に落ちないようにして、末端から取り付くこととする。しかし、ガスでルートを見失い、勢いで取り付いたことをおおいに後悔し、恐怖におののきながら懸垂下降3ピッチ、下った所で幕営する。

2日目の朝にとんでもない所を取り付いていたことが判明し、正式なルートに戻り、不帰I峰主稜に取り付く。核心部の断壁はあぶみで抜け、荷上げを行なう。7ピッチで断壁を抜け、その上部の狭い棚で、ザイルで確保しながらテントを張る。

3日目は、コンテとスタカット1ピッチで主稜を抜け、唐松岳を經由し、餓鬼尾根に入る。1,850mの避難小屋で快適な一夜を過ごす。

奥鐘山は、西壁を登る人くらいしか通らないところでルートはほとんど藪の中のラッセルである。南越の分岐辺りから雨が降りだし、気持ちがどんどん沈んでいく。1,170mで2ピッチ懸垂下降をおこない、1,000m付近で祖母谷方面に方向を変え、何度も懸垂下降を行なう。暗くなってから、隣で大きな岩雪崩があり、しかも、リヒトでの懸垂下降が危険なため、岩に体を固定し、雨の中でのビバークとなる。眠れぬ一夜を過ごした後、たった1ピッチの懸垂下降で下に降り着き、温泉に飛び込む。こんなつらい尾根は冬期には行きたくないと全員の意見が一致した。

3. 白馬主稜～八方尾根

期 日 5月2日～4日

メンバー L勝又、田山

八峰直下からザイルをつける。ナイフリッジと雪壁の連続で時間がかかる。不帰では、通過待ちで時間がかかる。山行中、初日にコンロの調子悪くなったり、予想より遅れて大変だった。

4. 別山南尾根登攀

期 日 4月29日

メンバー L山本、田端

みぞれまじりの雨の中、黒四ダムを出発する。今年は雪が少ないため、黒部川沿いには全く雪が無く、夏道を歩く。約1時間程歩いた、急な下りに差しかかる所で田端がつかずいて滑落し、唇の下を切ってしまう。慌てて

ダムに引き返し、大町の病院へ向かう。

■初夏合宿

— 穂高岳横尾定着 —

期 日 6月13日～21日

メンバー L山本、渡辺、菊谷、田端、下村、野本、
家口、勝又、伊藤、田山、平井、岩下、
梅田、大越、大野、谷、日本、門田、山田

6月13日 晴 新島々→岩魚止

新島々を出発する直前、1年生の1人が靴紐を踏んで
転び、顔面を打ち頬を擦りむいてしまう。先が思いやら
れたがその後は何事もなく進み、昼には岩魚止に着く。

6月14日 晴 CS→横尾BC

2本目から隊を2つに分け、先行隊は2年生のワング
ル並の気合でバリバリ歩く。徳沢で合流し全員ケルンを
参拝し横尾へ。先に入っていた下村、平井と合流する。

6月15日 曇～雨 BC⇔酒沢

雪訓に行くつもりで出発。今年は圧倒的に雪が少なく、
本谷橋は完全に出ている。酒沢の手前で雨が強く降って
くる。酒沢に着いたときには風も強くなり、雪訓をせず
に戻る。

6月16日 雨 停滞

朝から強い風と共に断続的な集中豪雨。食当はハイビ
シートを直しながらの大忙しの朝だった。

6月17日 晴 雪渓訓練

約2日の停滞ボケなのか、出発の準備が遅れ気味で、
なんとなく気合が入っていない。雨のため雪が少なくな
り、本谷橋からは夏道に行く。雪渓に降りた所から、
「競馬」をする。雪訓は1年生重視でみっちり行ない、
皆ふらふらになる。

6月18日 晴 分散登攀

①奥穂 ②前穂北尾根 ③北穂東稜 ④屏風岩東壁雲
稜ルート

天気は快晴で、絶好の登攀日和。1年生は大部分を奥
穂に集める。奥穂、前穂、北穂の3パーティーは酒沢で
合流して下るが、屏風岩パーティーは色々難しい所が
あり、遅くなってしまった。

6月19日 晴 BC→下山

①BC→上高地 ②BC→長嶺山→上高地

③BC→鍋冠山→小倉 ④BC→常念山荘

1年生はかなり疲れているが、予定通りに下山する。
燕岳隊は大天井岳までの予定だったが1名が日射病にか
かり、常念までにした。

6月20日 雨 常念山荘→須砂渡下山

ここから燕岳に行く予定だったが、暴風雨のため、一
ノ沢を下る。

■夏山合宿

— 立山東面内蔵ノ助谷左俣定着 —

期 日 7月25日～8月7日

メンバー L山本、菊谷、渡辺、家口、下村、田端、
勝又、野本、伊藤、田山、平井、岩下、
梅田、大越、大野、谷、日本、門田、山田
OB中嶋、高緑、中村(進)、鈴木(雅)

<入山>

1. 薬師隊

期 日 7月25日～28日

メンバー L山本、下村、田山、岩下、梅田、谷
連日、快適な天気のため、重荷もそれほど気にならず
良いペースで歩ける。五色ヶ原で疲労が激しい針ノ木隊
と合流し、大部隊を組んで元気良くBC入りした。

2. 針ノ木隊

期 日 7月26日～28日

メンバー L渡辺、伊藤、大越、山田、OB高緑
非常に雪の少ない針ノ木雪渓を上り、峠を越える。初
日の後半は雨になり、針ノ木谷の出合で天幕を張る。2
日目は、登山道というものが全く無いに等しい針ノ木谷
を沢下りのように下降し、平ノ渡に着く。後は五色ヶ原
までひたすら登り、薬師隊と合流する。

3. 大日隊

期 日 7月26日～28日

メンバー L野本、田端、大野、日本
キスリングがかなりの重さになり、ペースが上がらな
い。雨のために最悪状態の登山道歩く。大日平に着い
たものの、天幕を張ってはいけないため、小屋に素泊ま
りする。28日は内蔵ノ助カール上でボッカ隊と合流し、
ザイルをフィックスしてゴルジュを抜ける。BCは雪渓
が全く無く、一面に草が覆い繁っていて驚く。

4. ボッカ隊

期 日 7月27日～28日

メンバー L菊谷、勝又

<定着>

7月29日 晴 休養停滞

三本歯のルート整備とカール底のデポ回収、BCの整備に精を出す。

7月30日 晴 雪渓訓練

ゴルジュはいつも増して落石の危険大。雪訓は歩行訓練とジッヘルを行なう。途中で、後発隊の家口、平井、門田が合流する。BCに帰ると、鈴木OBがお見えになっていた。

7月31日 晴 雪渓訓練

雪訓はザイルワークを行なうが、富山テレビの撮影のために場所を空けたりしていたため、ダイナミックとコンテが出来なかった。昨日、内蔵ノ助山荘に泊まった平井と共に下る。

8月1日 晴 雪渓訓練

雪渓3日目。今日もいい天気。皆、疲れが溜まり始めている頃だ。昨日の残りのザイルワークを行ない、一旦切り上げてから2年生特訓を行なう。BC到着後、中嶋OBと中村OBがいらっしやる。

8月2日 晴 休養停滞

家口、勝又で三本歯のルート整備に行き、後は山菜取り。中村OBからストレッチを教えていただく。

8月3日 晴 分散登攀

- ①三尾根支稜 ②中央山稜主稜 ③中央山稜支稜
- ④剣ロング

今年は雪が少なく、東面には殆ど雪渓が見られない。中村OBと共に三尾根に行く。ここは、初登攀者の情熱の感じられるルートだ。また、1泊2日の予定で源治郎尾根にロングパーティーを出す。

8月4日 晴 分散登攀

- ①一尾根 ②三尾根主稜 ③ニードル稜 ④剣ロング

ニードル稜隊は、1年生の忘れ物と調子不良のため、取り付き手前で引き返すことになる。また、剣ロング隊は剣岳登頂後、全員疲労が激しく時間もおそくなってしまったため、急速剣沢に泊まることになる。

8月5日 晴 分散登攀

- ①二尾根 ②ニードル稜 ③剣ロング

剣ロング隊はコンビーフだけの朝食を済ませて、10時にはBCに着く。

8月6日 晴 分散登攀

- ①三尾根支稜 ②丸山尾根

さすがに分散登攀4日目ともなると、皆、疲労の色が濃い。ひるね岩で不調を訴えるものが出たため、パーティー編成の変更を余儀なくされる。

8月7日 晴 下山

非常に暑く、長い、定着合宿が無事終わった。上ノ廊下、下ノ廊下パーティーはダムへ、室堂、真砂パーティーは内蔵ノ助カールへと分かれ、下山する。

<後半分散合宿>

1. 黒部川上ノ廊下

期 日 8月8日～12日

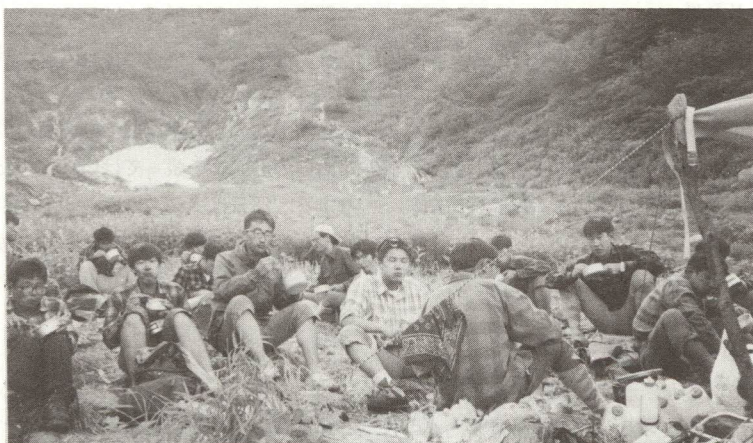
メンバー L野本、勝又、梅田、岩下

8月8日 晴 黒四ダム→奥黒部ヒュッテ

昨日、装備を大町まで降ろしに行った勝又が始発でダムまで戻って来る。平ノ渡では1歩遅れて舟が出てしまい、次の舟まで待つ羽目になる。今年はやけに水量が少ない。昨年より1mは少ないと思う。

8月9日 晴時々曇 CS→上ノ黒ビンガ先台地

予想通り楽である。渡渉も腰以上になる所はたいして無い。下ノ黒ビンガ出口はへつり、フィックスで通過でき、釣りをしながらゆっくりと天場を探す。中ノタル沢



▶夏山合宿

内蔵ノ助谷左俣BCにて

の出合で幕営するが、台風11号の情報をキャッチし、とりあえず上ノ黒ビンガを抜けてしまうことにして、あわてて出発する。

8月10日 雨 停滞

何日ぶりの雨であろうか。干からびた上ノ廊下もようやく本物の牙をみせようとしている。

8月11日 曇時々雨 CS→赤木沢手前

あれだけ降っても水量は増えない。よほど喉が乾いていたのだろう。あつと言う間に赤木沢手前まで来れた。赤木沢は明日のお楽しみとし、岩魚釣りをする。釣果は、4匹であった。焚火で焼いて食べる予定であったが、いきなり雨が降ってきてしまい、テントの中での岩魚汁になってしまった。

8月12日 晴 CS→折立下山

非常に天気が良い。これこそ「赤木沢日和」と言うべきか。山椒魚を捕まえながら楽しく溯行ができ、後は縦走路の下山となった。岩下と梅田は入山と同じ所に下山することになった。

2. 下ノ廊下～白馬岳

期 日 8月8日～12日

メンバー L家口、伊藤、田山、大越、日本、門田、田端、下村

8月8日 晴 内蔵ノ助出合→阿曾原温泉小屋

水平歩道には残雪も無く、天気にも恵まれ、定着合宿を終えた我々にはリフレッシュできる良い道である。

8月9日 晴 CS→祖母谷温泉

右手に黒部川を従え、快調に歩く。樺平で田端、下村と別れ、祖母谷まで行く。

8月10日 雨 CS→唐松岳頂上山荘

朝からあいにく雨であるが、危険なルートではないので行動する。昼過ぎには山頂山荘へ着く。

8月11日 曇～雨 CS→白馬山荘

不帰キレットを通過してから小雨が降りだす。時折出会う雷鳥を楽しみにしながら歩く。その夜、風雨が強まり、フライが破れる。

8月12日 晴 CS→蓮華温泉下山

3日ぶりの晴天に喜びCSを後にする。白馬岳への急登を終え、山頂に着くと人だらけ。早々に下山する。

3. 真砂沢定着～樺平

期 日 8月8日～11日

メンバー L山本、谷、山田

8月8日 晴 真砂沢CS→源治郎尾根

定着の疲労が抜け切らないので出発を遅らせるが、いまいち。源治郎尾根は末端より順調に登り、I・IIのコルからII峰側壁へトラバースするが、疲労が激しいため、Bフェースの登攀を中止して剣岳頂上へ向かう。

8月9日 晴 CS→ハツ峰VI峰Cフェース

カチカチに固まった長次郎雪渓に登り、Cフェースの取付に着くと、もう5パーティーも取り付いている。ややすいている剣稜会ルートに行くが、各テラスごとに待たされる。いい加減うんざりしながら、のんびり登る。3時間もかかった。

8月10日 雨 CS→阿曾原温泉

台風の影響で、実に17日目に始めてのまともな雨である。しかし、仙人谷沿いの道は、雨のためにかなり悪い道となり、重荷も手伝って危険な所もあった。3人ともメロメロになって阿曾原に着く。

8月11日 曇 CS→樺平下山

雨上がりの良く整備された水平道をひたすら歩く。この道にキスリングは良くない。志合谷のトンネルはおもしろかったが、ぎりぎりの大ききだった。

4. 大峰山脈縦走

期 日 8月12日～15日

メンバー L田端、大野

8月12日 曇～雨 近鉄下市口→山上ヶ岳

当初、吉野口入山を計画していたが、行者路ということから道の状態が気に掛かることと、人気が高いということから洞川口より入ることにした。女人禁制は厳しく守られており、入山口には御禁制の看板が立っていた。

8月13日 曇 CS→弥山小屋

御禁制の看板を過ぎて少し下ると、すぐ低山の様となり、弥山の手前の登りまではあまり景色の変化が無かった。この山脈は水場が少なく、水場であったこの小屋の手前にはドラム缶の雨水タンクがあるだけだった。

8月14日 晴 CS→赤井谷出合

弥山小屋は皇太子様が泊まれただけあって、完璧に整備されていた。前鬼口分岐の深仙の宿を過ぎたところから道の荒廃が激しく、整備された「ほんみち修道場」の釈迦ヶ岳登山道を下ってしまった。

8月15日 晴 CS→十津川温泉下車

「ほんみち修道場」から奥里の集落へ行き、結局、バスで大峰奥駈道の最終地点の玉置山へ向かい、登山口から歩くことにした。玉置山から駆け足気味で下り、硫黄の臭いのする温泉に入り、明日の熊野花火を楽しみに、この山行を終えることにした。

■秋山山行

1. 八ヶ岳、赤岳～天狗岳

期 日 10月17日～18日

メンバー L田山、平井、山田

10月17日 晴 美濃戸口→オーレン小屋

前日タクシーで美濃戸口に入る。昼頃赤岳に着き、のんびりと昼食をとったりする。

10月18日 曇～晴 CS→渋ノ湯下山

樹林帯を抜けると風が強く寒い。天狗岳に着く頃に晴れる。西天狗岳をピストンして下山する。

2. 谷川岳、茂倉岳～万太郎山

期 日 11月2日～4日

メンバー L渡辺、田端、平井、岩下、大野、日本

11月2日 晴 土樽→茂倉岳避難小屋

水上でステーションビバーク後、土樽より入山する。天気は快晴で気持ちが良い。ただ、登山道がトンネル工事のため見付けにくい。

11月3日 晴～曇 CS→大陣子避難小屋

ワンピッチほどで一ノ倉岳につき、それからは鳥帽子奥壁を見ながら歩く。午後からはそれまでと風向きが変わり天気が悪くなる。のんびりと行きたかったので、半日行動してそのまま昼寝。

11月4日 雨 CS→万太郎山→土樽下山

夜半から台風並の低気圧の通過で外は凄風である。意を決して外に飛び出す。万太郎山からは一気に走り、土樽にゴールイン。久しぶりに山で息抜きができたと思う。平井もかなり足の怪我が回復してきていて冬山にも手応えがあった。

=秋山・越後偵察山行=

1. 越後三山縦走

期 日 10月2日～4日

メンバー L渡辺、田端、谷

10月2日 晴 大崎口→霊泉小屋

大崎より入る。あくまでもこの山行は冬山への偵察である。そんなことから俄然気合が入る。

10月3日 晴～曇 CS→中ノ岳避難小屋

女人堂直下の斜面、薬師岳の斜面をチェックした後、核心部の八海山のルート偵察を行ない、詳細なルート図を作成する。鎖場が使用できればどうということはないが、とても苦勞するであろう。入道岳、五龍岳を経て、

次の核心部、オカメノゾキの通過である。せっかく登ったのにまた最低コルまで下降する。途中、蝮が道をふさいでいて細いオカメノゾキが通過できないというハプニングもあったが、空爆を加えて越える。やっとあたりが暗くなるころ中ノ岳の避難小屋に着く。

10月4日 曇～雨 CS→大湯

小屋で合流した荒沢岳偵察の菊谷とともに行動する。檜廊下は登山道が崩壊しておりなかなか悪い。それをこえると稜線も広くなりとても良い所だ。駒ガ岳より下降し、駒ノ小屋経由で大湯に下山。

2. 荒沢岳～中ノ岳～駒ガ岳

期 日 10月2日～4日

メンバー L菊谷、下村

10月2日 曇～雨 銀山平→荒沢岳→灰ノ又岳

タクシー代 7,000円で銀山平まで行き、雨の中で民家の軒先でビバークする。赤布を必要以上に多く付けながら前富士手の登りは鎖とハシゴの繰り返しで、前富士の岩場は夏道を通して行く。荒沢岳の手前から雨が強くなってきて、灰ノ又岳でツェルトにくるまった一夜はつらいものであった。

10月3日 曇～晴 CS→兎岳→中ノ岳

夜のうちに下村の咳がひどくなり、兎岳から十字峡に1人で下山させることにする。人が殆ど通らなかったようで、藪漕ぎにうんざりする。兎岳からは菊谷は駒ガ岳に向かう。

10月4日 晴 CS→駒ガ岳→大湯下山

八海山から来た3人と合流し、一緒に下山する。

3. 十字峡～中ノ岳 デポ上げ

期 日 10月27日～28日

メンバー L野本、家口、平井、大野

=秋山・黒部偵察山行=

1. 雲切尾根～小窓 デポ上げ

期 日 11月1日～6日

メンバー L山本、田山、大越

11月1日 晴 黒四ダム→S字峡

デポ上げを兼ねての偵察ということでかなり重いザックを背負って出発。良い天気の下、紅葉が美しい下ノ廊下を歩く。S字峡で横断地点の偵察を行い、雲切谷の出合の河原から対岸に渡渉して幕営する。

11月2日 晴 CS→雲切尾根 1,629m

雲切谷の出合に最も近い所から雲切尾根に取り付く。当たり前だが、ここには踏み跡ひとつ無く、最初から藪漕ぎになる。それでも始めの方は良かったのだが、徐々に、僕らを拒むように枝が下に向けた樹木が多くなり、なかなか進めない。結局、尾根の途中で水の無い一夜を過ごすことになった。

11月3日 晴 CS→仙人池ヒュッテ

乾ききった喉のまま朝から藪漕ぎ・傾斜は緩くなるが藪は更に厳しくなる。途中、雪を見つけた所で水作りをした。

11月4日 雨～みぞれ CS→小窓

池ノ平小屋付近から雨が降って来るが温かいので先へ行く。しかし、池ノ平山のケルンに着いたときには風がかなり強くなり全身びしょ濡れになる。小窓への下りで山本が15m程滑落するがたいした怪我は無く、途中でデポせずにそのまま小窓へ下る。

11月5日 雨～曇 停滞

朝から暴風雨のため停滞。昼過ぎから雨が上がったので、池ノ平山に少し登り返して、途中の木にデポ缶を固定する。

11月6日 晴 CS→黒四ダム下山

今日も午後から天気が崩れそうなので、剣岳へは向かわず、小窓雪渓を下る。途中で雪が無くなり、一旦平ノ池まで登り返す。その後は、ただただ歩くのみ。真砂からハシゴ谷乗越を経て、黒四ダムに着いた時にはもう真っ暗になっていた。

2. 赤岩尾根～鹿島槍ヶ岳～牛首尾根

期 日 11月2日～5日

メンバー L家口、野本、梅田、谷

11月2日 晴 大谷原→冷池小屋

赤岩尾根の取付には旧道と新道があるが新道に行く。高千穂平からは、細くナイフリッジになる所が出てくる。ピークの岩峰はトラバースして後立山の稜線に出た。

11月3日 晴時々曇 CS→牛首尾根 1,750m

雪はくるぶしあたりまでで、快適に進むが、梅田の調子が悪く少し遅れる。牛首山までは問題無く下降するが、牛首山から藪が現われ、更に2,302mからは木が高くなり、二重稜線にもなっていてコンパスを頼りに進む。

11月4日 雨 CS→牛首尾根 1,000m付近

朝から雨の降る嫌な天気の中出発しビショビショの藪漕ぎとなる。ここまで来るとコンパスだけが頼りの世界だ。1,639mを過ぎると左下に黒部川が見え、その上には大きなコンクリートの建物が見える。更に進むと、鉄

の塔があり、その上にはアンテナがある。「こんな所まで」と思ってしまう。1,500m付近まで来ると、S字峡の吊橋が見え、尾根上にはコンクリートの建物があり、その先からいよいよ懸垂下降が始まる。しかし、いきなりザイルが回収できず、野本がユマーリングで登り返して回収する。これでかなり時間を食ってしまい、リヒト行動になってしまうが、運良く高圧線の建物に降りることができた。

11月5日 雨時々晴 CS→仙人ダム

冷たいコンクリートを抜け出し、3ピッチの懸垂下降で河原へ下る。東谷を渡ろうと思うが雨のため水量が多い。勿論、本流も水量は多いが、水量が減るまで待つのもバカバカしいので、寒中水泳大会を行なう。本流の流れが緩やかな所を野本がトップで行き、ザイルを張る。4人とも無事に渡るが、寒くてしょうがない。仙人ダムのトンネルで暖まってから、トロッコに乗り榎平へ下山した。

■富士山合宿

— 富士山御殿場口六合目定着 —

期 日 12月1日～2日

メンバー L山本、渡辺、菊谷、田端、野本、家口、伊藤、田山、平井、岩下、梅田、大越、大野、谷、日本、山田

12月1日 晴 部室→新五合→六合小屋跡

部室の前から貸し切りバスで行ったのだが、手違いで1時間遅れの出発になった。御殿場口新五合目までバスで入る。ここで体操をして出発するが、12月とは思えないほど暑く、皆Tシャツで登る。だらだらと長いだけの登りであったが、ペースが上がらず、六合目辺りで暗くなる。しょうがなく雪の無い六合小屋跡で幕営する。

12月2日 晴 CS→新五合→青年の家下山

昨夜から異常なくらい強い風が吹き降ろしてくる。そのため、昨夜は寝ていられる状態でなかった。朝に近づくにつれて、風は更に強くなり、その風が巻き上げる石つぶのためにテントが破れてしまう。朝になるころには新品を含む、冬3張が石に擦れてボロボロになってしまい、ほぼ潰滅状態。撤退を余儀なくされる。

■冬山合宿

— 越後・駒ガ岳集中 —

1. 駒ガ岳アタック

期 日 12月23日～30日

メンバー L渡辺、勝又、伊藤、平井、岩下、大野、
日本、山田

2. 荒沢岳～駒ガ岳縦走

期 日 12月21日～31日

メンバー L菊谷、家口、田山、梅田、大越

3. 越後三山縦走（八海山～駒ガ岳）

期 日 12月21日～1月8日

メンバー L山本、野本、田端、谷

1. 駒ガ岳隊行動

12月23日 曇～雪 駒ノ湯→小倉山

前日、駒ノ湯まで入る。雪が全然無い。朝7時に出発する。雪が出てきたのは1,000mを越えたあたりからで、足首程度である。そこから少し行った所でワカンに履き変える。にせ小倉山の登りは膝下位の積雪。小倉山までの稜線には雪庇の発達もなく快適に進める。小倉山を越え少し下った所に天幕を張る。4時半の交信は荒沢岳パーティーとだけ入る。

12月24日 曇～雪 小倉山→駒ノ小屋

やや迷うような天候の中、歩き始める。1年生はワカンの着け方が遅い。雪の量はそれ程無いがトップを交替しながらラッセルを行なう。百草ノ池まで2時間かかる。そこより上部はさらにペースダウンした。西高東低が決まり始めたのか視界が悪くなる。1,730mピークを越えるとそれまで広がった稜線は細くなり、右側にでも落ちると嫌なのでトップラッセルは3年で行なう。風はそんなに強いとは感じない。ガスの切れ間から駒ノ小屋の鉄塔が見え、今日の行動終了。

12月25日 雪 停滞

6時朝食、7時出発予定。そのまま待機。風雪が激しくアタックには不向きと判断して8時停滞を決定。

12月26日 雪一時晴 駒ノ小屋⇄駒ケ岳

朝から風が強いので待機。小屋の入口の窓が氷り着き開けるのに時間がかかる。9時の天気図では二つ玉低気圧が来ていて明日の悪天を示している。10時の交信で八海山パーティーと連絡がとれる。彼らは午前だけの行動だそう。我々も停滞かと思ったその時、風も止み眼前に駒ケ岳が見えるではないか。明らかに擬似好天であることはわかっていたが、1時間もあれば頂上を往復でき

ると思い、急遽行動を開始する。小屋から上部は膝下位の雪で、主稜線には雪庇の発達は無く、雪も吹き飛んでいた。あっさり頂上に着き、15分程写真を撮ったりしてから下降に移る。途中からガスリ始めたが、それ程苦勞せず帰ってこれた。小屋に着いてからはただ雪合戦に終了した。

12月27日 雪 停滞

12月28日 曇～雪 駒ノ小屋→百草ノ池

駒ケ岳直下での雪訓は状態が良くないのでBCを移動する。日程に余裕があるので午後は停滞。

12月29日 曇一時雪 雪訓 百草ノ池→駒ノ湯

雪訓は駒ケ岳側の斜面で行なう。アイゼンを使用できる場所がなくロープワークの確認程度を目的とする。雪訓後、天幕を撤収して下山に移る。途中、八海山と交信ができ少し気がひけたが下降する。入山の時に比べて確かに雪の量は多いが楽に駒ノ湯に降りることができた。

12月30日 曇 駒ノ湯→大湯下山

ゆっくり朝食をとり下山。他の登山者も結構入って来たのでラッセルは無し。10時の交信では山本の声だけが入るのだが、こちらの声はまるで入らないようだ。山本の声をもBGMに歩く。

2. 荒沢岳隊行動

12月21日 晴 銀山平→1,240m

雪など無いと言われていたが、1本目からワカンをつけないといけない。しかし、予定の行動ができた。

12月22日 晴れ 前富士フィクス工作

菊谷、家口でフィクス工作、2年、1年は停滞とする。フィクスはまず下部を100m行ない、最後のルンゼと大岩の横を50m行なう。ルンゼを抜け、第一岩峰にロープを張り、合計250m工作を行なった。

12月23日 雨 停滞

低気圧が通過した晩から風が強まり、冬型が決まる。天気図をとってから停滞を決める。

12月24日 雪 CS→前富士手前コル

相変わらず冬型が決まり待機とするが、今後の予定を考えて、少しでも前へ進もうと10時45分に前富士手前のコルへと出発する。1ピッチだが風雪の中の行動はつらいものがあつた。

12月25日 雪 停滞

朝から外は雪が降っていて、岩に取り付くコンディションではなく、6時30分に停滞を決定する。1日中カードゲームを行なった。

12月26日 曇～雪 CS→前富士第2岩峰手前

朝から疑似好天を見越して前へ行動する。家口、田山でラッセルして、菊谷がカラビナを回収しながら登る。第1岩峰、8mの荷上げで5時間近くかかり、第2岩峰手前のコルで行動を終える。

12月27日 雪 停滞

冬型が決まり、停滞とする。コルに天幕を張っているせいもあり、風雪が強い。

12月28日 雪 CS⇨前窟フィックス工作

今日も雪が降っているが、リミットが近づいているのでフィックス工作に出る。1回目は風雪が強まり失敗に終わる。午後、2回目の工作に出る。第2岩峰は10mあり、アプミを使って越える。第4岩峰は25mあるが、さほど難しくはなく、前窟のフィックスはなんとか終えた。

12月29日 雪 CS⇨前窟第4岩峰

冬型が少し緩み、朝には風も余りなくなるが待機とする。天気図をとって9時20分行動を開始する。家口と1年生で第2岩峰を先に越え、菊谷、田山でテントをたため、上の3人が荷上げを行なう。その後、菊谷、大越で第4岩峰を越えるが時間が無くなり、元のCSに戻る。

12月30日 雪 停滞

冬型は緩みながらも決まり続け、30日までに荒沢岳を

越えるというリミットが来てしまい停滞する。

12月31日 晴 SC⇨銀山下山

撤退が決まり、今日下山であるが皮肉にも晴れてしまい悔しい。また来る事を誓い、下山する。

3. 八海山隊行動

12月21日 曇 大崎口⇨女人堂

昨夜は里宮神社の境内で幕営した。霊泉小屋までは夏道同然。その上からいきなりワカンでのラッセルとなる。重荷のため、全くペースが上がらず、4人という人数の少なさを痛感する。

12月22日 晴 CS⇨千本檜小屋(デポ上げ)

薬師岳までは昨日からあったトレースを追うのみ。千本檜小屋に着いてから、八海山はポーラのようにして越えることに決めて、山本、田端でルートワークとデポ上げのため八海山へ向かう。

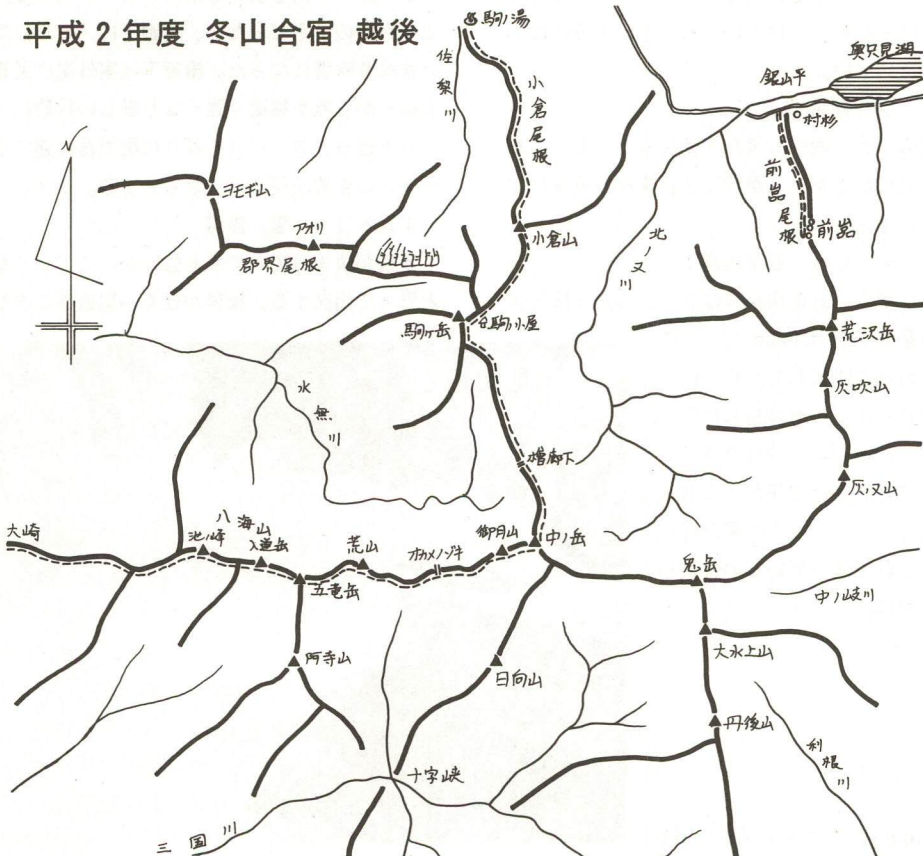
12月23日 雪 停滞

昨晩からみぞれと共に風が強くなり日中は吹雪になる。この小屋は住み心地は良いのだが多分にもれず寒い。

12月24日 雪 CS⇨大日岳の先

今日も吹雪だが、やや風が弱いので、デポを大日岳の

平成2年度 冬山合宿 越後



先まで上げるべく、田端、野本で行く。徐々に風が強まり気温が下がる中、予定通りデポを上げて昼過ぎに小屋に戻る。山本、谷はスタカットの練習のため不動岳を往復する。

12月25日 雪 停滞

昨日で八海山通過の準備は整ったので、何とか行きたかったが、ひどい天気なのでやめる。

12月26日 曇時々晴 CS→入道岳の肩

低気圧の接近による疑似好天を狙っての行動。田端、野本が組んで最終トップを務める。トップは雪壁を、物凄いラッセルをしながら所々クサリを掘り出し、微妙なバランスで越えて行く。なんとか好天のうちにデポを回収出来たが、1時間もしないうちにガスに含まれ、入道岳の肩の斜面を無理に切り崩して設営する。

12月27日 雪 停滞

昨日からの予想通り風雪。

12月28日 雪 停滞

冬型が緩まず、相変わらずのホワイトアウト。雪庇が恐ろしくて迂闊に動けない。

12月29日 雪 停滞

天気図上ではやや冬型が緩んできたので、回復を見込んで風雪の中を出発するが、視界が悪いままでやはり危険なので、1時間行動して頂上に設営する。実際には20m程しか動いていない。

12月30日 雪 停滞

物凄い風雪のため一晩中除雪が大変だった。もうこれで停滞も4日目になるが、おかげで全員床擦れ気味になってしまっている。

12月31日 晴 CS→五竜岳直下

見事な晴天になる。五竜岳からはリッジの急下降で少し渋い。五竜岳直下の1,585mピークの下の僅かな平坦地に設営してから、山本、野本で明日のためにラッセルをしに行く。雪庇は発達していないが、やはりラッセルがきつい。2時間かけて汗だくになりながら荒山まで行く。とうとう荒沢隊は下山らしい。これで残っているのは僕らのみ。頑張らねば。

1月1日 曇 CS→オカメノソキ→1,528mピーク

曇が低く広がりどんより曇っているが、無風で気温が高く、絶好の通過日和。荒山からトップは空身でラッセルするが、4人ではうまくいかない。最低コルに近づくとつれギャップが大きくなり、更にコルからは、両側が見事に切れ落ちたナイフリッジになっていて、ザイルがはずせない。コルから1,528m直下まで約10ピッチで乗り切る。1,528mに着いたときには暗くなっていて、湯沢スキー場のライトが嫌になるほどきれいに見えた。

1月2日 雪 CS→中ノ岳避難小屋

睡眠不足と昨日の重労働がこたえて、皆体が重い。昨夜は雨が降り、全身びしょ濡れの最低の朝になった。御月山への登りは氷の部分ダブルアックスで越える。中ノ岳へのラッセルがなくなると、いきなりガスの中から小屋が現れる。うれしさに目頭が熱くなる。中でデポした食糧を貧り食う。

1月3日 曇～晴 停滞

予想通り風雪。昨日、一昨日とハードな行動だったので、良い休みになった。今日も食い地獄。食べてはゴロ寝して、ささやかな正月気分を味わった。

1月4日 晴～雪 CS→駒ノ小屋

低気圧が本州を横断し始めるまでの疑似好天をつかんでの行動の予定だったが、檜廊下に入る辺りで崩れ始め、いきなり吹雪になった。檜廊下は案外楽に通過できたが、天狗平から風が物凄く強くなり厳しい状態になる。じりじりと進み、コンパスを頼りに駒が岳に達する。駒パーティーの赤旗を見つけ、ホッとする。

1月5日 雪 停滞

冬型が決まっていて風も強いが、ここからなら下れると思って出発する。視界が悪く小屋直下のクサリ場が危



▶冬山合宿 オカメノソキを望む

▶冬山合宿 中ノ岳避難小屋にて

険なので小屋に引き返す。しばらく待つが回復せず、まだ日数があるので無理しないことにする。

1月6日 雪 停滞

「今日こそは」の意気込みであったが、出鼻をくじく物凄い風雪のため、小屋に戻る。10時30分に様子を見に行くといくらか視界が効き、下るめどが見ついた。

1月7日 雪～晴 CS→駒ノ湯

今日はなんとしても下山しなければならぬので意を決して出発。視界は悪いが風はいくらか弱く、昨日めどをつけておいた所から下る。その後もコンパスを頼りの吹雪の中のラッセルが続く。度々尾根を見失い、戻ったり偵察したりと全然先に進めない。なんとか小倉山に着くがその下の尾根もラッセルが厳しく、天候は回復しているものうまく進めない。結局、駒ノ湯の約200m上の所で真っ暗になったため、傾いた所に設営する。

1月8日 雪 CS→大湯下山

朝から雪が降っているが、最後の気合を入れて出発。1時間で駒ノ湯に着くが、ここも雪の中。「もしかしたらここから車で」の思いは断たれ、トップ空身の交替ラッセルで行く。全員無言で黙々とラッセルを続ける。時間の経過がわからなくなり、いいかげん頭が真っ白になってきたとき、大湯スキー場の音楽が聞こえてくる。大湯の町の除雪された道の所で、やっと雪から開放される。皆、うれしきは隠せないが、疲れと安堵感のため、万歳をした後は一人一人静かに喜びをかみしめた。



び登るが、やはり藪漕ぎになる。かなり行くと足首までの雪になる。風越山の少し手前の平坦地に設営する。

2月15日 曇～雪 CS→独標尾根 2,118m

昨日は昼までの行動だったので、今日は飛ばそうと思ったがそうはいかなかった。樹林帯の中のラッセルは予想以上に厳しくなかなか進まない。2,118mピークの手前は、傾斜が強い岩と雪のミックスでいやらしい。

2月16日 雪～曇 CS→独標の先のコル

朝から吹雪。低気圧の通過で風が凄く強い。出だしから樹林帯のラッセル。いやらしい岩場やゴジラの背のような部分を通り、独標の手前まで来る。ここでやっと樹林から抜け出る。アイゼン、ワカン併用で独標に達する。ここから再び樹林帯に向かって下るが、いたるところで首まで埋まってしまううまく進めない。結局、下り切ったコルを三段に切り崩して天幕を設営する。

2月17日 曇 CS→中三ノ沢岳の先のコル

今日も朝から腰まで埋まるラッセル。いいかげんうんざりする。それでも中三ノ沢岳の下のコルまでは良かったが、ここからは小岩峰を巻ながら雪壁の登りとなり、ルートを開き切るのに時間を食う。結局時間切れになり、コルまで戻って幕営する。今日も天場を作るのに時間がかかった。

2月18日 晴 CS→三ノ沢岳→極楽平

久々の晴れであるが、うっすらと雲が拡がっている。気温は低くピリピリとする。しばらく行くと木が無くなり、雪庇に気を付けてのリッジ上のラッセルになる。更に行くと念願の三ノ沢岳だ。ここまでのルートを振り返り、その長さにうんざりする。大休憩のあと極楽平へ向かう。しかし、ここまで5日もかかるとは誰が予想したのだろうか。

■ 2月山行

— 中央アルプス 三ノ沢岳・独標尾根 —

期 日 2月14日～21日

メンバー L山本、渡辺、家口、野本、田端、伊藤、田山、岩下、梅田、大越、大野、谷、日本、山田

2月14日 晴 上松の神社→風越山

昨日は、上松駅から1時間歩き、村はずれの神社にテントを張った。神社の裏山から登り始めるが、いきなり藪漕ぎ。2ピッチで1,078mピークに着くが、眼下の林道を隔てた風越山の大きさに驚く。一旦林道に下り、再

2月19日 雪 停滞

昨夜から荒れ出した天気はおさまるところを知らず、各テント除雪に忙しい。

2月20日 曇～晴 CS→駒ガ岳→野猿の岩場

一応晴れだが、薄く雲が広がり風がやや強い。そして気温がかなり低い。まるで北海道のようだ。しかし、気合を入れて宝剣岳アタックに向かう。入山前の打合わせ通りにフィックスを行なって通過する。待ち時間が長く、凍傷になりかける者がでてしまう。宝剣山荘で、凍傷の危険のある渡辺と野本は先に千畳敷に下り、残りの者で駒ガ岳を往復してくる。全員で千畳敷に集合してから、ロープウェーとバスで下る。そして渡辺、野本、伊藤、田山は先に下山し、残りは野猿の岩場で暮営する。

2月21日 雪 野猿の岩場にてアイスクライミング
雪が舞い、やや肌寒い。C沢とF1とF2にトップロープを張り、みんなで楽しく登る。

■ 春山合宿

— 北アルプス剣岳集中 —

1. 黒部横断パーティー

鹿島槍ヶ岳赤岩尾根→牛首尾根下降→S字峡

→雲切尾根→剣岳→早月尾根下降

期 日 3月15日～31日

メンバー L山本、家口、大野、谷

2. 赤谷パーティー

赤谷尾根→赤谷山→北方稜線→剣岳→早月尾根下降

期 日 3月17日～31日

メンバー L渡辺、野本、菊谷、岩下、梅田、大越、
日本、山田、OB山本(修)

1. 黒部横断パーティー

3月15日 晴 大谷原手前→高千穂平手前

予想通り、タクシーは大谷原の手前までしか入らない。ここから赤岩尾根の末端までの林道をワカンをつけて歩く。赤岩尾根は末端の一番張り出した所から取り付く。途中、ワカンをつけて雪壁をトラバース中に、谷が滑落するが幸い何事もなかった。

3月16日 雪 CS→冷池

今日は朝から雪が降っているが、風が弱いのと視界が効くので出発。しょっぱなから厳しいラッセルが続くが、予想していた雪庇はない。最後の雪壁も雪崩の危険は感じなかった。



▲春山合宿 鹿島槍頂上

3月17日 雪 停滞

朝から吹雪。昨日の天気図から回復の見込みが無さそうなので早めに停滞を決める。

3月18日 晴 CS→牛首尾根 2,300m

高気圧のお蔭で昨日とは打って変って晴天である。布引山の手前で山本が足を滑らせて棒小屋沢側へ100m程滑落してしまう。幸い大きな怪我はなく鹿島槍南峰へ着く。はるか遠くの剣を見てうんざりしてしまう。牛首尾根はホイップクリームのような雪庇が付き、深いラッセルであった。

3月19日 晴 CS→1,300m要塞

今日も晴天である。コンパス片手にひたすらラッセルしながら下っていく。ルートファインディングは秋の偵察よりやさしい。要塞が見える崖の上からスタカットで3ピッチで下り、少し歩いてから要塞に降り立つ。

3月20日 雨 停滞

予想どおり曇っていたが次第に雨が降り出す。9時には完全に雨になり停滞を決める。10時からトンネルの探検をして時間をつぶす。

3月21日 雪～晴 停滞

朝から雪が舞い完全なホワイトアウト。停滞を決め焚火で暖を取る。

3月22日 曇～雨 CS→黒部川水平歩道トンネル

いよいよ前半の核心、黒部川への下降だ。天気予報では午後には雨が降ると言う。午前中に賭け下降を開始する。第一急下降は3ピッチの懸垂で終え、その後2ピッチスタカットして、第二急下降を7ピッチの懸垂で終え、黒部川を渡り水平道のトンネルの中で暮営した。

3月23日 雨 停滞

朝から雨で停滞する。

3月24日 晴 CS→雲切尾根 1,600m

雲切谷のデブリを利用して黒部川を渡る。雲切尾根は



▲小窓CSにて

き付近までラッセルを兼ねて偵察に行く。

3月18日 晴 CS→赤谷尾根 1,500m

積雪は膝下位。尾根末端の台地状の所から右に早月側より取付く。はじめワカンを付けたり外したり時間がかかるが、1,300m付近からは斜面が緩くなり、交替でラッセルをしながらスムーズに進む。

3月19日 晴 CS→赤谷尾根 1,900m

CSからザックをおいてラッセルをする。1,600m過ぎより雪の状態が悪く、トラバース気味に歩いてきたところ、足元からスッポリ切れる。そこからは完全にフィックスを張る。天幕を張った後に渡辺、野本でラッセルを兼ねた偵察を赤谷山の基部付近まで行なう。

3月20日 曇～雨 CS→赤谷山頂上

赤谷山直下から頂上まですべてフィックスロープを張る。菊谷、野本、大越をトップとし、フィックス4本、ザイル1本 240mを回収しながら回す。全部で 440m程伸ばした。途中雨が降り全員びしょ濡れになって赤谷山に着く。

3月21日 曇～晴 CS→大窓ルンゼ上部

早朝、前夜の雨の影響で体が濡れていたため出発を遅らせる。外は風が強く気温が低い。まず先発で菊谷、野本、大越でルート工作、そして1時間後に天幕撤収を行ない出発。赤ハゲ直下、白ハゲ間の雪壁に2本、そのほか数本張る。

3月22日 曇～雨 CS→大窓

曇り空、やや気温が低い。大窓への下降を行なう。天幕撤収時に渡辺、野本で下降ルートを開きに行く。ルンゼ内はフィックス3本で大窓に降り立ち、休憩後、渡辺、野本で大窓の頭の下部1ピッチにフィックスを張る。

3月23日 雨 停滞

横断隊と交信できないのが心配だ。

3月24日 晴 CS→池ノ平山

大窓の頭まで先発隊を出さないで行動する。頭で菊谷、野本がフィックスロープを張りに先行。池ノ平山までのルンゼは堅くアイゼンが良く利く。斜面は急でザイルを完璧に張ってユマーリングのような感じで通過。突き上げた所より少し仙人山奇りの所で天幕を張る。午後4時30分の交信で横断隊と初めて交信ができる。

3月25日 晴～曇 仙人山まで横断隊のサポートと小窓偵察

昨日の偵察で横断隊の現在地がわかったので、山本OB、野本、1年5名でサポートに行く。最初はトレースを付けるための予定であったが、思っていたより横断隊の動きが早く仙人山の先で合流してしまった。元気な4名と会えて良かった。久しぶりの握手を交わす。小窓への偵察には菊谷、渡辺で行く。

3月26日～3月31日まで横断隊と同じ行動。

《春山合宿を終えて》

剣を司馬遼太郎風に例えたならば、剣は登る目的のためにのみ作られたものだ。剣は美人より美しい。美人は見ている心はひきしまらぬが、剣の美しさは、肅然として男子の鉄腸をひきしめる。こんなところではないだろうか。魅力的な山域、黒部はリーダー会にとってそんな緊張感を生んだ。

現実と理想はなかなか結び着かないものである。黒部を調べれば調べるほど、それがよくわかる。安全性とより高度な山登り、この相い矛盾する課題と個人の満足、チームの満足、これらを噛み合わせる事が一番の問題であった。ただ剣に登るだけなら簡単である。しかしなぜ今年1年、厳しい訓練をし研究してきたかを考えると簡単なだけの山登りははたくなかった。

近年、山岳部の衰退が叫ばれている中、我が日大山岳部がなぜ、これだけ盛り返してきたのだろうか。OB諸氏の努力も協力もその一因である。学生側からみると誇りと自信を求めて入部するものも少なくない。学校、学部内を見回してみると、その半数が何のクラブにもサークルにも所属せず4年間を過ごす。その反動も大きいかもしれない。

反動が反動を呼び集まってくる部員は、何か特色もっている。いや、部に入ってからその個性がでるのかもしれない。今風の若者もいれば、60、70年代に生まれたら良かったようなもの、文系的な考え、理系的な考えのもの。その自由な発想から意見を出し戦い合う。前の会報で山岳部の意義について書かれたOBがいらした。山

▶ 春山合宿 剣岳間近



岳部は、仲間作りだ、と。同じことだと思うのだが、今、この黒部の計画を通してやってきた1年間で自分達にとって時間の共有こそが山岳部の意義ではないかと感じさせるのである。

主将山本も言っていたことであるが、一時消えかけた炎を我々は山岳部の歴代の計画を手本にして今まで来たと思う。この黒部が最も良い例で、これからの方向性を決めていくうえで1つの指標になればよい。こんな考えをこの山登りに取り入れて行きたかったのである。

（渡辺・記）

— 寄稿 —

事故と自分

平井 伸明

自分は今この文を病院のベットの上で書いています。昨日、2回目の手術を受けました。前年度の富士山合宿で右足関節を骨折し、入院し、手術した時、足首に入れられた金具を取るための手術でした。

手術中、事故の後あった事を考えていました。2ヶ月の入院生活、毎日のリハビリ。足首の自由が以前のようにはないことが分かった時。山に行きたくても行けない頃、みんなのおかげで2年にしては初めて入れた冬山合宿。本当にいろいろな事がありました。

何よりも一番落ち込んだ事は、両親に五体満足に生んでもらった身体を自分が好きな事をしていて不自由にし

てしまったことでした。自分の身体だから自分の責任だと言ってしまうまでもありますが、親の顔を見るのがしばらくつらかった事を思い出します。

4月に入り新1年生が入部してきました。その頃の自分は足に装具というものをつけ、松葉杖をつき、どうか部会に参加することが出来るようになっていました。

山岳部は山に入るのは当たり前。しかし、自分は山に入れない。部員も増え、活気が出てくる中で自分は部の中で何をすべきか。山に入らない上級生を1年はどう思うのだろうか。マネージャーにでもなるしかないのか。部をやめようか。その頃は部会に参加することがおっくうでなりませんでした。

しかし、物事は良い方向に考えた方が得だと思っている自分は、今やれることをやっという事に落ち着きました。酒の好きな自分はなるべく飲む機会を多く持つようにしたりして、1年生の意見を聞いたりすることに努めたりしたこともありました。

初夏合宿、夏合宿はテントキーパー。ようやく秋口に入る頃からぼちぼちと山に入る事が出来るようになり、自己の目標を冬山合宿におきました。今の自分の足はどのくらい歩ける状態であるのかを知るため、秋はなるべく山に入るように努めました。

そして、富士山合宿が終わり、いよいよ冬山ということになりました。でも自分なりに考えて冬山は無理という結論を出しました。しかし、先輩方は

「平井は冬山に連れて行く。」

と、いってくれました。こうして2年生にして初めて冬山を経験することができました。

3月の中旬には、春山合宿に出発します。自分は今回は見送りです。2月山行も見送りでした。もう見送りは十分です。今は他の部員と色々な面で大きな差がついています。みんなに少しでも早く追い付けるように、また、引っ張っていけるようにどんだんがんばっていかなくてはと今は考えています。

今回、チーフの山本さんに、骨折してからの事を書いてくれと頼まれたとき正直な所あまり気が進みませんでした。しかし、今後事故に遭う部員の確率がゼロになることはないと思います。何かの参考にならばと思い、この文を書きました。

最後になりましたが、今回の事故に当たり、OB、監督、コーチ会の皆様には本当に世話になりました。これからご指導の程、よろしく願いたします。

■個人山行

- ・丹沢 勸七ノ沢
5月20日 L渡辺、田端、岩下、梅田
- ・丹沢 水無川本谷
5月20日 L家口、田山、大野、山田
- ・丹沢 葛葉川本谷
5月20日 L山本、伊藤、谷、門田
- ・丹沢 セドノ沢左俣
5月20日 L野本、菊谷、日本
- ・谷川岳 一ノ倉沢登攀
5月27日 L菊谷、渡辺
- ・奥多摩 多摩川海沢
5月27日 L伊藤、田山
- ・北アルプス 北鎌尾根
5月22日～25日 L勝又、家口
- ・丹沢 中川川悪沢
7月1日 L勝又、渡辺、日本
- ・飯豊 実川前川本流
8月24日～28日 L渡辺、家口、野本、日本
- ・尾瀬 鬼怒川湯沢～尾瀬ヶ原
8月22日～25日 L勝又、伊藤、岩下、山田
- ・南アルプス 荒川細沢～北岳バットレス
8月28日～9月1日 L山本、梅田、大野
- ・南アルプス 鋸岳～鳳凰山
8月30日～9月3日 L田端、谷

- ・南アルプス 北岳バットレス
9月4日～7日 L家口、田端、谷
- ・中央アルプス 北部全山縦走
9月1日～3日 L田山、大越、門田
- ・黒部 下ノ廊下
9月5日～6日 L野本、菊谷、山本、渡辺、勝又、平井
- ・黒部 猫又谷
9月7日～8日 L渡辺、勝又
- ・黒部 奥鐘山西壁
9月7日～9日 L菊谷、山本
- ・奥秩父 雲取山
9月23日～24日 L平井、大越
- ・中央アルプス 木曾駒ヶ岳
10月11日～12日 L平井、他2名
- ・伊豆 天城峠縦走
10月21日 L田端、大越
- ・谷川岳 米子沢
10月21日 L勝又、他1名

■岩登リトレーニング

鷹取山	3回
日和田山	3回
氷川屏風岩	1回
三ツ峠	1回
越沢バットレス	1回
広沢寺	1回
城ヶ崎	1回

■その他

- ・新入生歓迎山行
場 所 奥多摩川井キャンプ場
期 日 5月13日
メンバー L山本以下18名
- ・天幕懇親会
11月17日～18日 奥多摩 鳩ノ巣キャンプ場
- ・河口湖マラソン
11月25日

桜門山岳会

— 平成2年度 活動を顧みて —

桜門山岳会理事長 中嶋 啓

本年度は、学生の活動同様に平穏な一年間であったと思います。その一因は学生山岳部の充実であり、我々OBにとっては、卒業以来働きバチ的思考から余暇利用の世相変化が生じ、比較的に山への時間が取り易くなった事も懇親山行等をしやすくしており、OB会活動を平穏に過ごさせてくれる一因かもしれません。

今年度の山岳部では、沼尻前部長（前副総長・文理学部長）に代わり、我々の仲間である平山善吉氏（建. 31卒、日本大学常務理事・理工学部教授）が就任されました。平山部長は職務柄、学生には近寄りたいたい存在かもしれませんが、山岳部のより以上の発展が期待出来ますし、桜門山岳会としても期待し、側面から協力をしていきたいと思っております。

一方、山岳部創成期に活躍された初見一雄（2月6日）、窪田宗英（2月26日）の両氏に引き続き、昭和10年代前半に山岳部長をなさった相良次郎氏（4月29日）が亡くなられた事は非常に残念です。

今年度も引き続き会員間の親睦を図るために、桜門山岳会短信、及び会報28号の発行・配布に当たっては全会員に無償配布し、学生やOB諸氏の活躍状況を可能な限り周知してきました。

また、各種行事も多々用意し、四国・石鎚山集会（5月）をはじめ、秋のから酒澤集会（10月）などを実施し、9月には第一回・桜門山岳会親睦ゴルフコンペと称してOBのゴルフ大会を茨城県笠間市・富士CCにて、戸倉OB（経42）の世話で開催しました。ゴルフ大会には、多少の批判はありましたが、幹事・戸倉氏の努力により、平日にもかかわらず20名の会員が集まり盛況の内に開催することが出来ました。参加者の大半は、次回（3年度）の開催を望む声が多数あり、このような山以外にも懇親の場を求めていく必要性を感じました。

私が実施して来ました桜門山岳会短信、及び会報の発行・配布については、桜門山岳会会費元資への食い潰しかもしれませんが、短信・会報・懇親会（山行）等の機会を多くすることにより、山岳部活動やOB諸氏の近況

を知り、学生山岳部や桜門山岳会への関心が少しでも高まる事を願って理事長就任以来、発刊して来ました。

その効果として、各行事（総会・懇親会等）へ参加されるOBが増加傾向にあり、また、各種集会における返信状況も、この度の平成2年度総会の結果を見ますと、発信数約240通中、110通の返信があり、その内45名が出席の返事（総会出席者数45名）を頂きました。

地方集会の手始めとして実施しました5月の四国・石鎚山集会（20名）より、先日（平成3年5月25日～26日）実施しました伯耆大山集会では22名の方々が参加し、18名が頂上に登りました。伯耆大山集会の懇親の中では、次回・平成4年度は、高千穂峡・和田旅館〔和田OB（化34）〕での集会案が浮上してきました。

一方、学生山岳部は新人8名を迎え、7名が残り、殆どの山行に参加しております。、各山行とも18名前後の部員が参加し、近年にない上級生の充実もあり、活気ある山登りをしています。

その成果として、最終目標とした春山合宿（黒部横断と剣岳集中）においては、一年生全員（7名）が参加し、鹿島槍ヶ岳より剣岳への黒部横断隊4名、赤谷尾根隊9名（内OB2名参加）が参加しましたが、黒部横断と全員剣岳登頂という成果を得て早月尾根を無事下山しました。

私が理事長に就任した当時を思いいますと現状は出来過ぎの感がありますが、これからも学生や若いOBたちの活動し易い環境作りを進め、学生に魅力ある山岳部の育成を図ると共に、OB会の和を深めるため各種の懇親山行・集会等（既に実施～伯耆大山・初見さんを偲ぶ会～6月15日）を実施して行きたいと思っております。

欲を言えば、目下一部のOBらが進めています計画《チョー・オユー（池田錦重）、パミール（中村進）》は別として、出来るなら桜門山岳会としての海外遠征計画を持つべき時期ではないかと思っております。

平成4年秋には、岡田、村口元ヒマルチュリ隊の仲間によるマカール北西稜が予定されています。

敢えて、今後の課題を上げるならば、

- ① 桜門山岳会会費について
- ② 日本大学山岳部（桜門山岳会）史の整理と記録保存
- ③ 学生の獲得（部員募集など）と海外遠征

①については、各種通知・会員名簿・会報・短信等の発行の定期化を図っていますが、現状の終身会費制（一人50,000円）で良いのか？—今後の会運営にあたっての経費の使い道を含めて—

②については、戦前～日本大学山岳部々報1、岳人2、霧氷1～9号、若き山霊に捧ぐ、などが発刊されてきましたが、太平洋戦争を境として、昭和20年前後の記録を含めて、山岳部記録の統一と収集・整理等が必要ではないかと思ひます。特に、戦前活躍されましたOB諸氏の訃報にあたり、記録の大切さを感じますので。

記録収集は山岳部史にとって欠くことの出来ない事だと思ひます。

③については、学生山岳部の盛況はOB会にも波及しますので、来年度の部員募集には、部員募集への再度のテコ入れを要すると思ひます。努力（時には、経費をかけて）をすれば、それなりの答えが出るように感じます。

ここ4年間の部員数は〔4年生6名（10名）、3年生3名（3名）、2年生7名（8名）、1年生5名の計21

名（26名）〕（数字は平成3年5月16日現在の在籍者、（ ）内は募集時の入部者）となっています。

海外登山については、総会において古野コーチの報告にもありましたように、非常に身近になった海外登山状況をより理解していかなければならないと思ひます。

その他、桜門山岳会には、個々にあげれば多くの課題はありますが、いずれにしても、理事会等を年間6回位（隔月）開催し、評議員を始め会員諸氏に周知し、学生に理解あるOB会でありたいと思ひます。

それには、当然学生からの積極的な働きを必要としますので、どしどし働き掛けを期待します。

また、各山行の計画・報告は勿論の事、山への誘いなど学生の活動を機会ある度に平山部長やコーチ会、理事会等に持ち込んで欲しいものです。

今後もより以上に学生への理解を深め、桜門山岳会の発展を進めて行きます。このような中で、会員各位には、より以上のご協力を願ひまして、平成2年度の活動状況を顧みしました。

1991年4月

平成2年度（桜門山岳会）活動経過

平成2年5月～平成3年4月、（ ）内；学生

会	回	月 日	場 所	主 な 内 容	出 席 者
理 事 会	1	5. 31	千石・宮長スタジオ	平成2年度事業計画	10(2)
	2	7. 20	アルティール新宿	今年度懇親会、山行、会報28号、パミール登山隊等について	9(2)
	3	9. 13	千石・宮長スタジオ	今年度懇親会（ゴルフ・酒沢等）、新部長天幕懇親会等について	10
	4	12. 20	アルティール新宿	役員懇親会を兼ねて、新旧部長歓送迎会等について	12(1)
	5	2. 20	千石・宮長スタジオ	桜門山岳会総会・役員改選等、副会長職の設置について	4
	6	4. 5	アルティール新宿	平成2年度桜門山岳会総会（5/16）および役員改選等について	11(2)
集 会 と O B 動 向		月 日	場 所 お よ び 内 容		参 加 者
		5. 12～13	四国・石鎚山	石小屋ロッジより頂上往復	16
		8. 28～31	南ア・仙丈岳	シルバーOB会山行	10
		9. 19	笠間市富士CC	桜門山岳会親睦ゴルフコンペ	20
		10. 6～7	穂高・酒沢ヒュッテ	酒沢集会	32
		11. 17～18	鳩ノ巣キャンプ場（奥多摩）	秋季天幕懇親会	10(17)
		11. 28	日本大学会館（本部大講堂）	沼尻正隆先生古稀祝賀会	OB関係 16(3)
		1. 18	アルカディア市ヶ谷	新旧山岳部長歓送迎会	52(16)
	1. 26～27	静岡厚生年金休暇センター	佐藤耕三・坂省三両氏を語る会	27	
	27	位牌岳(1,457m)登頂		7	

寄稿

フォルクローレを 聴きながら

昭和59年文理卒 山本 修

〔1〕登りながら

7月24日。私の今までの人生では、もっとも長い一日だった。昼過ぎ、成田を飛び立ったのに、24時間以上経過しても、なお日付けは24日を脱出できないでいる。

もちろん、これが日付変更線の成せる技だという位、察しの付いている方も多かろう。そう、ここは南米大陸の上空である。赤道を越えて南半球へ。ペルー・リマへの着陸もあと僅か。長い24日ともお別れだ。

物騒な深夜の空港に、わざわざ迎えに来ていただいたのは、この地でアルパカのセーターなどを商う太田氏。神奈川大学の山岳部OBでもある。車で空港から30分余り、太田氏の自宅に落ち着き、久々に身体を伸ばす。

すでに先輩の村口さんと奥さんの妙子さんが、ボリビアのラパスで私を待っているはずだ。

*

「アッタマ、イッテナァ！」

「ほんと、どうにかなんないの?！」

「また、アイスハーケンが刺さったよう！」

「ほんと?山チャン。それで何本目?」

「もう7本だよ! 妙子さんは?」

「んー。……頂上まで行くの?!!」

ザイルにつながれながら、愚痴をこぼしあっていた2人の視線が村口さんに注がれる。被写体をアマゾン源流の山々に求めていたカメラマン氏は振り返ると、

「カッターリナァ。行くの止めちゃうか?」

だと。この人のとぼけた口調では、誰も本気にはしないって!

すでに4時間以上は歩いたろうか。6時にAC(5,300m)を出発したが、目指すワイナポトシの頂上(6,088m)にはまだたどり着かない。

▶ 順化で登ったチャカルタヤ(5,200m)からのワイナポトシ南西面。ルートは氷河の真ん中をトラバースして北側へまわり込む

このアンデス山脈、ボリビアの山に登ろうと提案したのは私。

「うん。山ちゃん行こう。南米はいいよ。」

とすぐにのってきたのは妙子さん。

「おもしろえかもしれねえな。」

仕事のスケジュールを気にしながらも、腰を上げてきた旦那の村口さん。電話一本で夫婦一組と厄介者一人の登山隊の出来上がり。

「なんで、ボリビアの山に目を付けたの?」

妙子さんの質問に答えて、

「夏休みの7月、8月って向こうでは乾期だから、登山のベストシーズンなんですよ。」

「それは知ってる。夏休みのネパールは雨期だもんね。」

「それからアンデスの山は、ヒマラヤみたいに許可を取る必要もないでしょ。」

「でもペルーの方が山がたくさんあるじゃない。」

「そうだけど、ワスカランとかけっこう日本にも知られているじゃないですか。でもボリビアの山に行った事のある人って、まわりにいないでしょう?」

「そうだね。聞いたことないね。」

「それに簡単に6,000m峰にたてちゃう。」

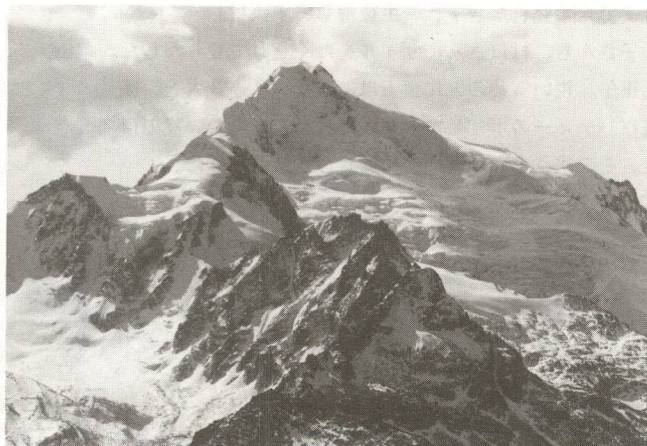
「えっ?なんで?」

「ボリビアの首都ラパスで、標高3,600m。車をチャーターして、アプローチに使えば、もう5,000m近くになるでしょ。残り1,000mと少しを登れば、6,000m峰登頂者ですよ。」

なんて安易なんだ!!

好条件も裏を返せば悪条件。

高所順化に時間もかけられずに山に取りついている。仕事上チベットなどでの取材が多く、ある程度の順化をしている村口さんは別としても、私と妙子さんの頭痛はただならない。まるで頭にコの字形をしたアイスハーケ





▲ワイナポトシ頂上稜線の妙子さんと私

ンが、高度を稼ぐに従って打ち込まれるような気がする。村口さんのレンズがこちらを向いた。笑ったつもりだが、顔が歪んだと表現したほうが正解だろう。

*

さぁ、レーションのハムも腹に入れたし、水分も補給した。

「行くしかないでしょう」と妙子さんに私。

ヒドンクレパスを用心しながら、3人の前進が再開した。亀よりはましだろう。

ルートはやがて雪壁となる。ピッケルを握る手にも力が入る苦しい急登。しかし、頂上は近い。それなのに、「もう降りたいよ。登らなくていいよ」と妙子さんがすっかり弱気になってきた。私だって、妙子さんを励ましてはいるが、決して楽ではない。

「もうひと頑張り！」

「もうすぐそこですよ！」

私自身への呼び掛けでもある。そして決め手は、「ここまで来て登れなきゃ、一生後悔しますよ!!」妙子さんも、村口さんにザイルをたぐられて登りだした。

正午。鋭い雪稜の上に頂上はあった。私達3人と、後続パーティーのボリビア人一人で身動きできない程の頂上。その狭さと高山病のために喜びも希薄だった。

「ここからどうやって降りるの？」と妙子さん。確かに左右は、雪庇と滑落すれば止まりそうもない急斜面。不安になる気持ちも理解できる。そこを村口さん、「登れたところは降りれるの！」となだめている。

「本当だろうね」

「しつこいなあ。山ちゃん、トップで下ってよ。俺、こいつと降りるからよぉ」

ザイルを引きずりながら、私がまず下降する。油断ならないところだが、必要以上に慎重になったようだ。雪稜の後半はスタスタと歩いてきた妙子さん、

「なんだ、たいしたことなかったね！」
そりゃないでしょう!!

さらに加えて、ACに帰着しても、こめかみを押さえて、

「まだ、3本抜けないよう！」

と騒ぐ私に、回復してしまった妙子さんは、

「しょうがないやつだねえ」

とおっしゃる。そうケラケラ笑うこともないでしょう!! 頂上直下で泣き言を言い出したのは誰だ?!

*

登頂の疲労を満足感に交換して、3人はソング・ダム(4,800m)に下山した。

気のいいタクシーの運転手のおちゃんが、約束の時間通りラパスから迎えにきた。

「グラジャス!グラジャス！」

村口さんと私はありがとうばかりを連発して、おっちゃんに右手を差し出す。

スペイン語の日常会話程度には不自由しない妙子さんが、昨日の登頂を説明すると、おっちゃんもニコニコと再び握手を求めてきた。

時としてリヤマの群れを横目に、ワイナポトシの姿が小さくなっていく。中古のサニーはおっちゃんの自慢らしいが、締め切った窓からの土ぼこりの侵入は防ぎようもない。

1990年8月2日。これが私の29回目の誕生日だ。(この日、イラクがクウェートに侵攻していたなんて、知る



▲登頂後ソング・ダムにて。後方はワイナポトシ

由もない) 28歳最後の1日も、記念すべき1日となった。

しかし、アンデスの大地を走る車の中で、私はいい得ぬ不安を覚えていた。28歳が終わってしまったのだ。

28歳。小学生の頃の私が考えていた私の28歳は、当然のように就職し、結婚をしているだろうという年齢だった。

ひょっとしたら子供さえいるかもしれない。それは、ただ漠然と何の根拠もなく中学、高校に進んでも、大きな変化はなかった。また大学に入学してさえも、29歳以降の自分の人生を想像することは不可能に近いことだった。

今、予測していた自分からは距離を隔てて私がいる。そして、これから先の手がかりもよく見えない。29歳からの私とこの茫洋とした大地が重なる。いったい、どうすりゃいいんだ?!

*

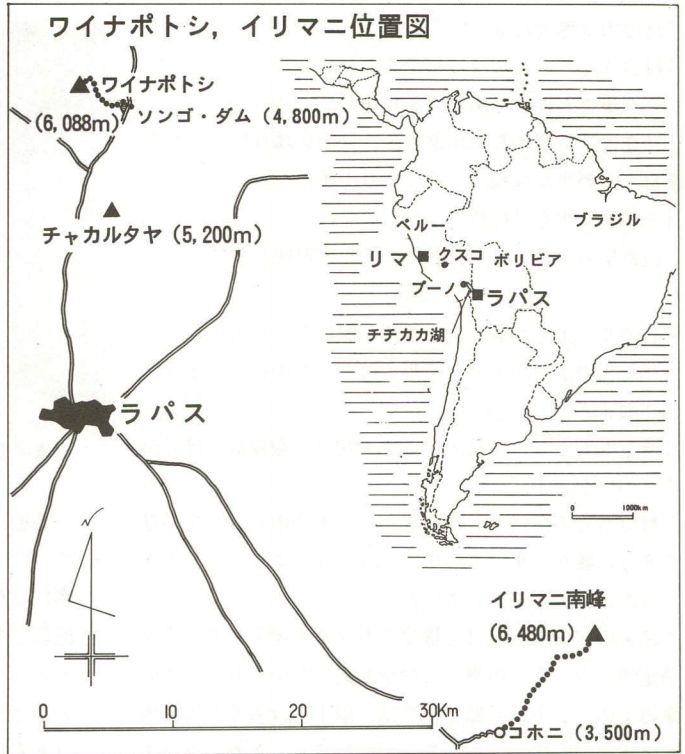
29歳最初の挑戦には、イリマニ南峰(6,480m)が選ばれた。ラパスの町から最も良く見えるのがイリマニ。この山は北峰、中央峰、南峰、からなる。ラパスの町から眺めると、雨の日の夏の家型テントのようだ。3つのポールの部分だけが高さを保ち、尾根を派生させている。

ラパスから3泊4日で、ワイナポトシを終えた村口さんと私は山の選択を始めた。妙子さんは、1つ登って満足しているようだが、私は順化しきらずに登山を終わってしまったことで、じくじたる思いをしていた。日数にも体力にもまだ余裕はある。

日本で情報収集もままならず、ボリビアへ飛んできてしまった3人だが、どうにかなるもので、精度の高そうな地図も手にいれた。しかし、イリマニにピークが2つしか記されていないのは、どうしたことだろう。

ラパス在住の藤本さんにもご協力いただいた。特に、藤本さん所有の4WDに運転手をつけて貸していただいたことで、イリマニへのアプローチが容易になった。中古のサニーでは無理な山道のようなだから。

藤本さんからは恐ろしい話も伺った。ボリビア各地の山、あるいは麓の集落で外国からの登山者が行方不明となっていたり、変死を遂げていたり、地元民に殺害されているという。一見、平和そうなこの国もかすれぬ問題を抱え込んでいるラテンアメリカの一国に相違はない。とりあえず、イリマニ周辺の村に反政府ゲリラはいないようだ。



「おっ。ここまでですか」
 「ええ。もういいでしょ。はあーっ。今日も辛かった」
 「もうこれより上に行っても変わらねえよ」
 「ええ。そうすっよ。はあーっ。順化しねえなあ」
 「よお。ここにテント張れるよなあ」
 「ええ。なんとかなるでしょ」
 標高 5,350m程だろうか。「コンドルの巣」と呼ばれている本来のキャンプサイトは、まだ上部だが、もうこれ以上登りたくない私は、無責任な返答ばかりをしている。自分自身への苛立ちもつけ加えて。

イリマニも楽々とは登らせてはもらえない。昨日も昼に4WDで到着したコロイコの集落(3,300m)から、馬一頭に馬方を雇って標高差 1,000mを登ったが、馬のペースの速いこと。坂道では彼らにグイグイと差を引き離される。それをいいことに、丘の上で馬方は勝手に馬から荷を下ろしだしている。

「おいここまでか？水場はどこなんだ？」
 「すぐだ。この向こうにある」

身振り手振りを交えての村口さんのスペイン語会話はつたないが、しっかりボーナスだけは要求されてしまう。「くそっ！水場なんてねえじゃねえか！」と憤っている村口さん。ここまで馬のペースに翻弄されてきて、足元がおぼつかない。5歩進んでは、呼吸を整えている。

私も馬の荷を分配されて、あえぎながら、

「馬の力は偉大だぁ」

「村口さんでもこんなにバテるのかぁ」

と3歩ごとに妙な感心ばかりをしている。

私達は1時間余りの彷徨の末、残照を頼りにテントを設営し、わずかな残雪で水つくりを始めた。

「とにかく水を1杯飲もうや」

疲れ切った2人は夕食もそこそこに熟睡した。

*

今日のルートもガレてばかりで、頭に来たなぁ！」

「早く雪の上をアイゼンで歩きたかったのに、しょうがねえなぁ！」

「ザックも重かったなぁ！ まぁ明日は登攀具だけだから、いいかぁ！」

村口さんの反応もお構いなしに、午後の日射しを浴びて十分に暖かいテントの中、私はミルクコーヒーをすすりながら、またグチっていた。

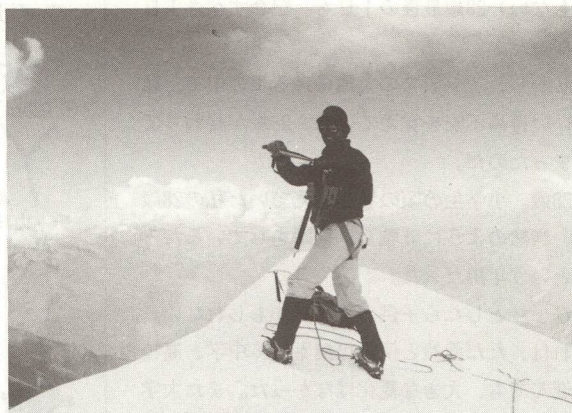
あまのじゃくな私は上機嫌でもグチを連発してしまう。予定地「コンドルの巣」には少し足りないにせよ、この崖の上のテントから顔を出せば、眼下には荒涼たる大地が無限の如く広がっている。空気は澄み、首都のラパスも遠望できるが、この世には私達2人以外の人間は存在していないようだ。(男同士ということに多少の不満も……)

「よくここまで来たなぁ」

様々な感慨がこの一言に集約される。くつろいだ午後、地球の大自然に酔い、私の気持ちがりフレッシュされていく。顔からは気付かぬうちに、エヘラエヘラと笑みがこぼれる。



▲2日目イリマニ 5,000m付近のガレ場を登る。
喜びも苦しみも体力しだい



▲イリマニ頂上の私

最近、似ても似つかぬ状況の中で、これと似た感情を持った。年末の私は、やぼように追われ、自分自身の仕事に取りかかれず、イライラと過ごしていた。ようやく区切りを付け、今晚は徹夜をしても、仕事を片付けようという夜。緊張までの一刹那。私は馴染みの定食屋へと駆けた。

「とんかつ定食に卵つけて！ それにお新香とあつ揚げも！」

たいして空腹だった訳でもない。拘束されていた自分に、時間が取り戻せたことがうれしくて、一人ではしゃいでいた。カウンターの隣では、ビールにつまみを取ったおっさんが、競馬新聞を掲げ誰も相手にしない講釈をしていた。飯をほおぼりながら、私は何故かニタニタとしてしまった。

その一方で決心も固まった。

「さぁて。ヤッテヤルカァ！」

*

夜もまだ明けぬ6時に行動開始。水ついた斜面は、容易にアイゼンの歯を受け入れない。息は切れても神経は張り詰めたまま。

やがてルート上にクレバスが、大きく口を開けているのが確認できる。2人はザイルを結び合う。トレースはクレバスの接合部を巧みに縫ってはいるが、時にはジャンプも必要とする。

それからは頂上の肩までの斜面を、村口さんの刻んだステップに導かれ、無心に登る。頭痛こそないが、依然として歩調は重い。まだ順化せぬ体には、苦しい登高。

私を確保していた村口さんとの再会にも、私はしょげている。

「足が前に出ないんですね」

「順化している時間がなかったんだ、誰だってそうなる

もんだ。それによお、世の中には高山病になりたくても、なれない奴はいっぱいいるんだ！」

「んー。俺は幸せ者かぁ?! 村口さん、ここにザック置いて、行ってもいいですよ」

頂上をあきらめている私でもなかった。

私が頂上の肩にザックを残置した40分余りの後、ボリビア建国記念日の8月6日の正午に2人は、イリマニ南峰の頂きを極めた。ボリビア国旗のリボンをピッケルに結び、ささやかな記念撮影。

ヒドンクレパスにはまり、雲に包まれた下山だったが「コンドルの巣」では、大挙入山していたイタリア人に囲まれ、盛んに祝福される。ホットジュースもおいしい。

「グラシャス、グラシャス。いや、グラッチェ、グラッチェ」

私の語学力はこの程度だ。

下山するばかりなのに、翌日も快調ではなかった。特に足の指の爪を痛め、またしても村口さんに大きく引き離されて、コホニの集落に帰り着いた。しかし、うれしいことに4WDの運転手のおじさんは、チキンの丸焼きを用意して、妙子さんと待っていた。

満腹になった私達を乗せて、4WDは不気味なサボテン畑の中を駆け上がる。下校途中の子供達が、手を振りながら追ってくる。侵食されて切れ込んだ谷は、私達に自然のダイナミズムを見せてつけているかのようだ。

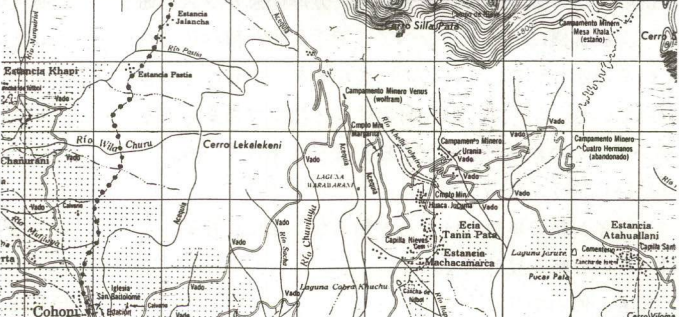
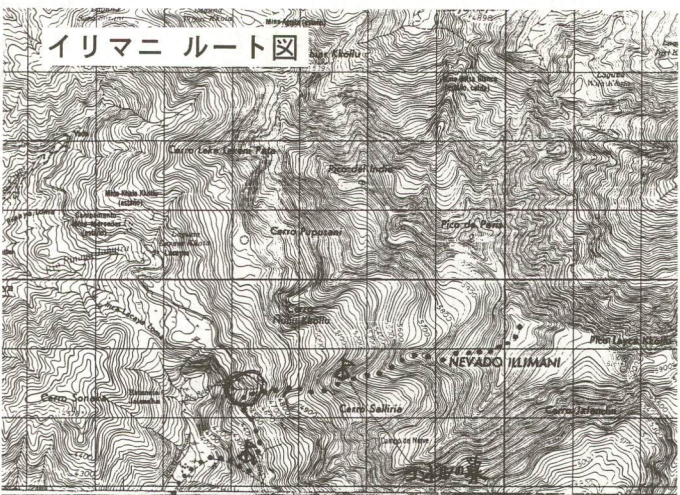
太陽は、急行したラパスの町で沈んだ。

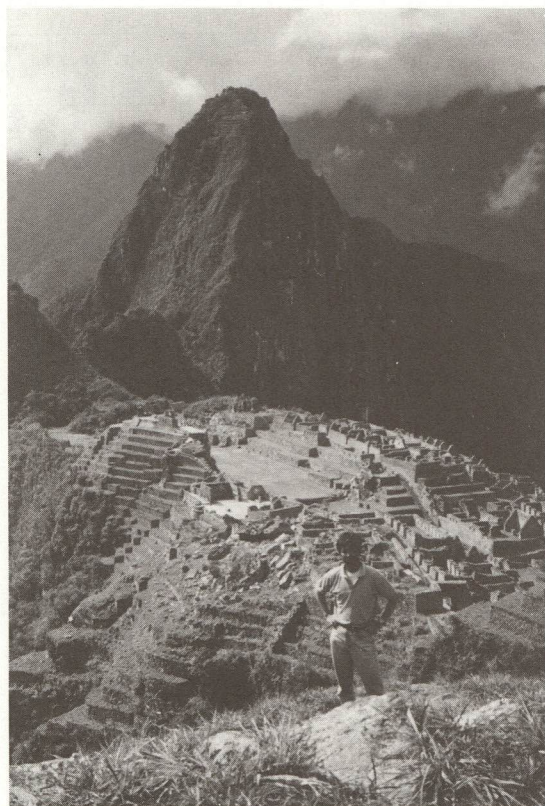
〔2〕歩きながら

中古のサニーがトラックやバスに追い越されながら、ゴトゴトと上り坂を詰めていく。この町から外へ出るには、常に曲がりくねった坂道を上らねばならない。

ボリビアの首都ラパスは、標高 4,000mの平原にすりばちが埋まっているようなものだ。山から眺めると、人造物が皆無に近い大地の中でこの異常な空間だけが、夜には精彩を放つ。

この町は、すりばちの底の部分に外資系企業の近代的ビルが並ぶ。そのまわりをホテル、官庁、高級住宅地が取り囲む。しかし、上になれはるほど建つ家は粗末になる。その最上部で





▲マチュピチュの遺跡にて

は、斜面にかりうじてへばり付いているようだ。この富士山の高度にある首都では、住む場所の空気の濃い、薄いに貧富の差が現れる。先住民インディオは皆貧しい。(インディオという用語も失礼なので使いたくないが、日本では、これに代わる適切な用語も見つからないので、以後もお許しいただきたい)

さて、今日8月8日で村口夫妻とも別行動を取ることになる。2人は仕事のために、ひと足先の帰国をせねばならない。先日は2人に、この世界最高所の国際空港に迎えに来てもらったが、今日はボリビアの山々の眺めも絶景なこの空港へ私が2人を送る番である。

2人のボリビア貨幣を使い切ってしまうと、3人で空港のカフェテラスで軽食を取る。分厚い窓ガラスを通して、旅客機にベルトコンベアーで手荷物が積み込まれているのがわかる。すばしこい犬がその上で匂いを嗅ぎ分けている。ラパスでは、町の辻などにココアの葉を売るインディオのおばちゃんが、日がな一日座っている。

「だいじょうぶだろうねえ」

スペイン語の単語もほとんど知らない私に、妙子さんは一応の心配を見せてくれる。

「ま、何とかありますよ」

とアラブでも、アフリカでも何とかなった私はたいして気にも止めていない。語学よりも、噂に高いペルー、特に首都リマの治安の悪さが気に掛かる。

*

その日から村口夫妻の居なくなった「ホテル・サガルナガ」のツインの一室を、平田君という東京の学生と割り勘にして、住み始めた。昼には遺跡へも出掛けたが、登山で余した日本食を肴に飲み会を開くほうが、一日の目的だった。1台のコンロと少しの醤油でもあれば、長い海外旅行は随分と楽しくなる。これは私の持論。

彼とは共にペルーへの越境をして、チチカカ湖のタキール島へも渡ったりした。真っ青な空と湖水に囲まれた、のどかなこの島では、素朴なインディオの人達が、あまり現代には感化されずに生活している。産業らしい産業もないが、この島では男達も編み物をして、その手作りの帽子も生計の助けとしている。子供達も羊を足で追いながら、手からは編み棒を離さない。

粗末な民宿での一夜も、日本人ということもあって好意的に迎えられた。

「フヒモリ！ フヒモリ！」

と連呼されるが、大統領に就任したばかりのフジモリ氏を、フジモリと発音できないようだ。夜、私達が日本のインスタントラーメンなどを振る舞うと、民宿一家の親父さんは、調子の外れたギターを持ち出して、歌と演奏を披露してくれた。

チチカカ湖畔の町、プーノで平田君と別れ、私はかつてのインカ帝国の首都、クスコへと4,000mの高所を走る列車で向かった。空中都市マチュピチュを始めとして、クスコ周辺には遺跡が散在しており、巨石を巧みに切断、造形した文化には、素直に感動させられる。

それに、この町には日本人の経営する「ペンション花田」がある。日本人旅行者のたまり場は、情報交換をワイワイとやることもできるし、新しいパートナーも見つかるというものだ。

*

毎度のことではあるが、旅に出れば様々な人と巡り合う。この南米でも、アンデスの山々に登る4人の日本人と出合った。

往きのロスアンゼルスで、声をかけてきた浦和市の山岳会に属する横田氏と松木氏は、2人合わせると米寿だとか。ワイナポトシでも偶然いっしょになった。高度障害で借しくも頂上は逃していたが、ペルーとの国境に近いアポロバンバ山群などで、いくつかの5,000m峰に登頂したようだ。

クスコの「ペンション花田」に逗留していた岩崎氏は、私より1歳年長。大学山岳部の出身者で、ヒマラヤ遠征の経験も豊富。共通の知人も多くて、話題には事欠かなかった。今回はバタゴニア、アコンカグアを友人と登り、南米大陸を北上、ワイナポトシもイリマニも単独で登頂したとのこと。私を山屋と見ると、ワスカランのパートナーにと盛んに誘ってくれた。

リマでお世話になった太田氏のお宅で知り合ったのが、阿部氏。30代も半ば。ここ6年も連続で、ワスカラン、アルパマヨなど秀麗な6,000m峰、5,000m峰が集中する、ペルー・ブランカ山群に通い詰めているとのこと。そして、日頃はジムで体力の維持、増強を計っているらしい。

皆、方向性の違いはあるにせよ、共通しているのは自由な感覚でアンデスの山に取り組んでいるということだ。「登ってみたい山に登る」

「今度だめなら、また次の機会もある」

個々発想次第では、すぐに可能性を追求できる山登り本来の楽しさがあるし、一部のヒマラヤ登山に見られる束縛感、悲壮感は微塵もない。ともすれば会社組織に陥る団体登山とは違って、自分自身の責任の範囲内で行動している。

私だってその一人だという自負もあるが、この中では一番の若輩者だ。日本を遠く離れて山岳雑誌の記録欄などもお構いなしに、ひたすらに山登りを楽しむ先輩達に私も、「ヤッテルナァ！」とうれしくなってしまう。

*

どんよりと曇り、気温の上昇しないリマの町へと約1ヵ月振りに帰ってきたのは、8月22日。先日の短いリマ滞在では、ほとんど太田氏宅を離れずに観光もしていなかった。そんな理由で私は、クスコからの同行者、市川さんと旧市街の中心部にあたるサンマルチン広場の近くにホテルを求めた。

「何で、そんな危ないところに泊まってるんだ?!」

太田氏の忠告を聞く受話器にあてた耳が痛い。確かに、この周辺の雑踏の中かなりの数の泥棒とその予備軍が紛れ込んでいるに違いない。しかし、ここまでの旅行中に幸運にも私は、それらしい被害にも逢わなかったし、男2人ならという気持ちもあった。だが内心、けっこう泥棒に期待している面もあった。旅行者の情報を集めていると、泥棒体験も南米旅行に欠かせぬ通過儀礼じゃないかという気すら起こしていた。

8月25日。この日が私にとっての南米最後の1日になるはずだった。そして、この日ほど私にペルー、ラテンアメリカを強烈に印象付けた日はなかった。

街頭に立つ両替商の今日のレートは、1US\$ = 360,000インティ（当時のペルーの通貨単位）らしい。1ヵ月前が145,000インティだったことを思い起こすと、約2倍半ということか。驚異的なインフレである。その間に物価は5倍、6倍とそれ以上に高騰している。ガソリンなど1日で30倍に跳ね上がった日もあったということだ。庶民の生活の苦しさは言わずもがなである。そして、それはペルー、とりわけ大都会リマの危険さに結びついている。

そんなことを頭の片隅に思い浮かべながらも気は抜かず一人、昼過ぎのサンマルチン広場から人ごみの中を歩いていた。（市川さんは前日に帰国した）

1人の男が声を掛けてきた。私の左手首を指差している。時計をみせろということか。それはだめだ。こんな男は危ない。無視して通り過ぎる。

2人連れの男がすれ違い様に、私を呼び止めた。背中に何か付いているって！ うそだろ！ よくある手口だな。あっちに行けよ！ うさんくさい2人の男を手で追い払っていた。そのすき、別の男が一瞬にして私のベルトからウエストバッグを引きちぎった。茫然とする私。男は一目散に駆け出している。2人連れの男もいっしょだ。私もスクランブルする。男達はいつの間にか5人組になっている。群衆は事件の推移を十分に承知しているが、誰も私に加勢してくれない。5人組は路地裏に逃げ込んだ。私は追跡を止めた。ウエストバッグの中身はメモ帳、ボールペン、バンダナ。

*

「やっぱりウエストバッグは、人目に付くところにしちゃいけませんよ」

その日の夕方、太田氏のお店で臨時店員を務めた私は、



▲タキーレ島の素朴な子供たち

日本人のツアー客に経験に基づき注意を促していた。

「でも、せっかくペルーまで来たんだから、泥棒に遭った方がいいですよ」

「泥棒に遭わないとラテンアメリカは語れませんよ」

こんな無茶苦茶な軽口を叩けるのは、パスポートも現金も被害にあっていないからだ。

夜はツアー客の方々と共に、フンボルト海流で取れた新鮮な魚の手巻き鮓などを太田氏のお宅で御馳走のなった。楽しい宴は私にとっての、南米最後の一夜にふさわしいはずだった。そして、ツアーの一行と、大型バスで午後10時に空港へと到着した。ツアー客のほとんどは、私と同じ便でロスアンゼルスに向かう。

アルゼンチン航空のチェックインカウンターに、赤いパスポートが山と積まれた。もちろん、私のものも含まれている。私はすっかり親しくなっていたツアー客の人達と談笑をしていた。そこへ事件発覚。私の名前が搭乗者リストにないというではないか！

「そんなバカな!!…… 5日前にクスコの旅行社を通して、リコンファーム(再確認)してますよ! その時のレシートも持っていますよ!」

私もリマでもう一度念を押すべきだったが、クスコの旅行社がリコンファームした記録は、航空会社のコンピューターには残されていない。どうやら旅行社のミスらしい。

1つの座席でも余れば、搭乗できることになったので、私も楽観主義者になっていたが、ついに余裕は生まれなかった。私は知る限りの英語を尽くして、交渉にあたった。しかし、それも空しかった。26日になった。あと30分後には機上の人となっていたのに、今はツアーを率いていた稲村氏の車で、市内へと逆戻りしていた。

「もうペルーに住んでしまいなさいよ」

「そうそう。この調子じゃ、日本に帰ってもいいことな

いわよ」

まだ南米に残るツアー客の婦人方から、さんざん冷やかされてしまう。

「最後の最後で、とことんペルーを思い知らされたなあ」
車の中では、苦笑いと溜め息ばかりが出てくる。

*

私のリマ滞在は2日延びた。まあ、それは良いが、ロスアンゼルスでも接続の大韓航空にあぶれ、翌日を待ったが成田直行便をキャンセルする客はいなかった。また明日か。しかし、ロスの滞在費は安くない。それならば、いっそ。

私は日本をまたいでソウルへ飛んだ。チケットの変更は簡単だった。ソウルに行けば、成田行きの大韓航空は毎日4便を数える。9月になる前に確実に帰国したい。それに焼肉とキムチも悪くなくろう。

8月31日。残暑の続く日本へ、私は南米みやげの高麗人参茶を手にも舞い戻った。

*

さて、私はこの文章を起草するにあたって、困ったことがあった。リマで盗まれたメモ帳に、私の日記が記されていたのだ。きっかけがつかめずに難渋したが、持ち帰ったポリビアやペルーのフォルクローレ(民族音楽)のカセットを聞くことで、魂だけがアンデスに揺り帰されていくような気がしてきた。旅行中もラパスやクスコのペーニャ(ライブハウス)によく足を運び音楽に身を浸した。

フォルクローレは、「コンドルは飛んでいく」に代表されるように、その曲調に哀愁を帯びているものが多い。インディオの人達の貧しさ、苦しさの表現とも言われるが、それらを紛らわすためのものか、小気味良いリズムも合わせ持っている。

太鼓、ギター、チャランゴ(小型のギターで背にアルマジロの皮が使われているものもある)、ケーナ(たて笛)などが、フォルクローレの楽器として使用されるが、圧巻なのはサンポーニャである。

長短の竹を組み合わせたこの楽器は、ハーモニカのように音階ごとに吹き分け、形は日本の雅楽に使われる笙に似ている。大きさは実に様々で、小さいものは手のひら位、大きいものは大人の身長ほどもある。だから、かん高い音、野太い音はそのサイズで吹き分ける。

そして、吹き続けるには、かなりの肺活量が要求される。さらにラパスもクスコも標高3,000mを優に越す高所である。眉間にしわを寄せ、一心不乱に演奏する姿は、見る私に感動を与え、その音には魂が何かに訴えかけら



▲ペーニャでのフォルクローレ演奏

れているようだった。

*

ミサイルの飛び交う湾岸戦争を伝えるニュースの合間。TVからCMが流れる。

「人は感動するために生きている」

最後になりましたが、旅行中お世話になった全ての方々にグラシャス！ ムーチャスグラシャス!!

(1991年1月)

マカルーと“山の神”

昭和47年経済卒 岡田 貞夫

1986年、ヒマルチュリの帰りのキャラバンは、現状を直視する自分と、無理やり全てを否定するのに懸命な自分がいた。

村口と二人、会話など生まれぬ状況の中で絶望に打ち勝つ何か欲しかった。現実を把握すればする程、一時を豊かにしてくれる希望にうえていた。今の体験を悲しみだけで終わらせたくはなかった。

*

あれから5年、自身でもよく解からない何かにこだわりの続けていた中からマカルー計画は肉付けがされてきた。

何故マカルーなのか。世界で最も荘厳な独立峰であり、ヒマルチュリの延長線上の山として我々には存在するからである。

ヒマラヤ 8,000m峰登山は、ネパール政府観光省が一山一隊入山の原則を崩した頃から形態が変わりつつあり、組織力に頼らない個人山行的色彩の登山隊が増えてきている。

我々二人のチームも数に頼る事ないシンプルでありながらも安全確実にベース迄帰ってくる登山を目指しており、今迄とは違って肩の力をぬいた身軽なヒマラヤ登山隊になるだろう。ヒマラヤが近くなったとはいえ、経験だけに頼った作戦では虚しい行動となり、結果も容易に想像がつく。気力が燃焼してとらせた行動だけでは体力がついてこない。高峰登山の原点は体力が基本であり、それにタクティクスがつながって始めて頂上が見えてくると信じている。強い意志を持ち続けるだけの裏付けを行なって来た我々は、一步、また一步とビスタリではあるが着実にマカルーに近づいている。

「雪豹クラブ」を発足させ、都岳連に加盟。一連の手続きを経て、外務省よりネパール政府観光省へ申請書類が送られた。90年11月、仮許可証が発行され、12月には登山料の払い込みを済ませ、山登りとは直接関わりの薄い部分をほぼ終了した。残りは、具体的な準備と、現地での交渉である。

8,463mのこの巨峰はどうしたら登れるか、またどの様にして登るか、基本的タクティクスも出来上がりつつある。毎年とまではいかないまでも、高所の経験を増やすのが最良の方法であることは充分過ぎる程に理解しているつもりだ。されどそれに費やす時間の作れない自分には、都会でのトレーニングを積み重ね、山に登って山を見つめるしかない。あたりまえのことを、あたりまえにこなしていく難しさをこつこつとクリアーしている毎日である。

ネパールの子供達の輝くほどに澄んだまなざしと、愛くるしい程の微笑み、大気圏をぬけ遙か宇宙にまで続いているのではと感じられる空の色がたまらなく懐かしい。

*

とある日曜日。柴田ドクター、高橋さん、妻と私の4人で丹沢に向かう。大滝沢の地獄棚は氷のかけらを8個の目玉が執念深く探しても発見する事はできなかった。パイルを握るはずの手には一升瓶が、ピッケルのはずの片方の手には酒の入ったボールが乗っており、このメンバー構成から考えるとアイスクライミングよりもよほど自然の中に溶け込んでいる美しい姿があった。焚き火を着にして約1時間、カラッポになった一升瓶を各自の胃袋が確認し、目的を達したので早々に下山に移る。大井松田の手造りのラー油の旨いラーメン屋に寄ってビールでも飲んで帰ろうと考えていたら、

「岡田君、僕の知っている店が小田原にあるんだが、時間も早いし寄っていかないかい？」

「ドクターの行きつけのフランス料理の店とはそら楽しみだ。うまい酒もあるだろうしな。岡田、車を小田原にまわせ」

という事になり、一路我が4WDは国道255号線を南へ進む。ハンドルをにぎりながらも心地よい酔いも手伝って、上の臉と下の臉がつい仲良くなりそうな頃ビストロに到着。柴田ドクターのおごりということもあって料理が実に旨かった。3人で一升飲んだうえ赤ワイン2本をあげ、何故か吟醸酒までが出てきてそれも半分程胃の中に収まり酩酊の淵に近づいてきた時、突然高橋さんが、「ナーア おくさん、岡田のマカルー行きはもう承知したのかい？」



▲12月23日、富士山八合目付近にて敗退。
「こんな日に登るのはアホウだ！」捨てぜりふを残す岡田。
こんなことでマカルーに登れるのだろうか？

酔っていた私も高橋さんと打ち合わせをしていた訳ではないし、ドキリとしたが良いチャンスと思い、そっと椅子を後に引き下げ静観する立場を確保した。

「高橋さん、この人は二度目に帰って来た時にもう絶対に行かないと私に誓ったんですヨ。マカルーに行きたいなど問答無用、まったくの問題外です」

「そらまーあ、そうなんだが、男が一度口に出したからにはそれなりの考えがあつての事だろうし、もう引込ませる訳にもいかなのだよ」

「こればかりは、ドクターや高橋さんのお口添えでも絶対に聞き入れる訳にはまいりません」

酔っている高橋さんとしらふの女房とでは理路整然と返答する側に歩がありそうである。すでに周囲は日が落ち、寒々とした雰囲気は何となくこの場を象徴している様子であった。でも直、高橋さんの説得工作は続く。トイレに中座した女房のいぬ間に高橋さん曰く、「お前のカーチャン、本当に強情だ、イヤ、マイッタマイッタ、でもまかしておけナ、岡田ヨ」といってポンと胸を叩いた。この時程高橋さんの背後に御光が射している様に感じられた事はなかった。目をこすると、高橋さんの姿が重なって見えていたのも事実であった。

テーブルに戻った女房を隣に座らせた高橋さん、
「ナ、おくさんヨ、ではこうしよう。岡田は、マ、しょうがない、行くには行かせろ。しかし、BCより100mだけ高く登ってそれ以上はけして登らせない。力不足でダメでしたとってBCを死守させる。そういう事でいいナ、よし決定だ、ナ、おくさん」

あの日より数ヶ月が経過した。夜になると口実を付けコソコソと家を出ていき、村口と会ってマカルーの計画を練っている。高橋さんの工作は成功には至らなかった

のである。女房曰く、「人間、夢を持つ事は素晴らしいワ、でも実現不可能な事は、早くあきらめた方が楽ヨ」

*

もうひとつの日曜日。日光浴をしながら本を一冊読み終える。マージャンのお誘いもなかった。娘の作ってくれた遅い昼食も済ませ仕事のストレスからも解放され精神の安定している平和な日曜日の夕暮れ時、缶ビールを飲みながらこの原稿を書いていると妻が出先から帰って来て隣の部屋で着替えをしている。

「銀座に出掛けてデパートのおかず売り場に足を踏み入れなかったなんて何年ぶりかしら」と、ごきげんである。しばらくして私の居る部屋に入るなり、顔の造形と声質に一大変化がおきた。

「またそんな事やってんの、いいかげんにしなさいヨ」

マカルーの写真、関係書類が目に入ったからである。最近では意識的ではあるが、愛想良くしている私であるがとたんに口数が少なくなり、目線を合わせない努力をする様になる。晩酌の肴を期待していた私は、すきっ腹をかかえて溜め息が一つ、「ああ今夜もおしかりを受けるのか」

でも私は我慢強い。他人には我慢出来ない二度の実績(?)もある。今年は男の厄年なんだ、頭を下げれば小言も上を通過すると昔の人もいっている。無償の征服者を夢みた私だが、最近の自分は無冠の帝王ならぬ途中下山の岡田になりさがっている。年を越せばツキが向こうから飛び込んでくるかもしれない、ジッと耐え忍んでいよう……。

こんな境遇に陥ると自然と彼を思い出す。村口はいいナ、奴はビンボーだが、使いきれないだけのヒマを持っている。私もビンボーになってみたいと本気で感じる今日この頃である。
(1991.5月)

追悼

森田博正君を憶う

昭和33年工学部卒 村石 幸彦

昭和29年入学、すぐに山岳部に入った仲間は確か50名位だったと思う。部員減に悩む昨今から見ると嘘のような話ではあるが、エベレスト峰（チョモランマ）初登頂（昭和28年）に端を発し、日本隊によるマナスル峰初登頂（昭和31年）によって火がつけられた戦後の登山ブームの始まりであった。昭和32年には73名の入部者があり、総員106名となったほどである。

だが我々はその年の11月28日、富士山合宿中に雪崩のため一挙に8人の仲間を失ってしまった。翌年の6月、最後に発見された小松君の遺体を茶毘に付し、遭難の処理が一段落したのを期に、日大山岳部再建の重苦しい雰囲気能耐えかねて、次々と仲間が部を去って行った。

残った数少ない同期の中からここ1、2年の間に、青木君、西田君、牛奥君と相次いで鬼籍に入り、ついに森田君までも……。言葉を失なう。

当時の山岳部は文系、理工系、医学部等を問わず日大の全学部から巾広く人材が集まって来た。そして合宿ともなれば30~50名位の参加は常であり、山行前の準備は大変なものであった。世相は戦後の混乱の余韻を引きずっており、物資や食物は不足ぎみであった。天幕、ザイル、ラジウスの確保から始まり、ピッケル、アイゼンはもとより、個人装備に属するザック（キスリング型）、登山靴、はては靴下、肌着（毛製のもの当時貴重品であった）までも先輩の所を駆けまわって拝借しなければならなかった。

森田君の得意な分野は押し出しの効く太めの体軀となめらかな弁舌によるマネージャー的な仕事であったが、食糧に関しても強かった。御徒町での大量の食糧調達の手腕は抜群であったし、当時は彼の指導の下にマヨネーズからカレーに至るまで手作りで用意したもので、山行前になると準備でこったがえす狭い部室の中はゴーゴーというラジウスの音、小麦粉とラードの焦げる匂いやカレーの匂い、生タマゴの殻の山等々で満ちみちていた。この光景は35年以上経った今でもありありと目に浮

び、匂いまで感じることが出来る。

もちろん山に入ってから調理の腕前は一級であり、食事当番でない時でも炊事場へ行くと必ず彼の姿が見うけられた。

雑談が始まると話の中心人物は森田君であった。博学でややベダンティックな青木君に対し、森田君の豊富な雑学とそれを面白おかしく表現する話術によって皆明るく楽しい雰囲気になって行った。それは辛い合宿のひと時、縦走中のつかの間のイッポンの時、あるいは吹雪のテントの中で、苦しい疲れ切った体にいつも元気回復の栄養ドリンク以上の効きめをもたらしてくれた。

卒業後も良く仲間と集まったが、会合の後夜遅くなくても、どんな遠まわりでも自分の車で送ってくれた。但し話に無中になると赤信号にも気がつかず、突っ走るといふ恐怖のおまけ付きではあったが……。

少し太めの体と話し方の印象から一見ズボラで太っ腹のように見えたが、実際は繊細な神経と温かい心の持主であったし、寂しがり屋でもあったと思う。

我々が卒業したのは日本経済の高度成長が始まった時であり、お互いが自分にかかわる世界の拡大発展に全力を尽し、また家族を守る生活に追われて、付き合う回数も次第に少なくなって行った。しかし我々山の仲間は会わなくとも離れていても、常にほのぼのとした心の支えであることに変わりはない。

これらの友が次々に先に逝ってしまい、残念であり寂しくてたまらない。

天国にも山はあるのだろうか。富士山で逝った仲間や楨田君、青木君、西田君、牛奥君達と昔のとおりワイワイガヤガヤとやりながら山へ登っているのだろうか。

想い出と悲しみにはキリがない。最後に、残された御家族の御健闘と御多幸をお祈りし、また故森田君の御冥福をお祈りして筆を置く。

1991年5月

故 藤田達夫さんを偲んで

昭和19年建築科卒 田中 昇

平成元年6月初旬新田氏より、藤田さんが交通事故に遭い入院されたので御見舞いに行きませんか、との電話を頂き吃驚り。早速6月8日(木)に田園都市線の青葉台駅より北へ約1.5kmの所に有る橋台病院に御見舞に行った次第でした。病床の藤田兄は「おお良く来て呉れた」と一言申されたきりで、あとはあまり話も出来ず、約1時間程して失礼しましたが、あの慎重居士そのものの様な藤田さんが交通事故に遭うなんて、考えられない思いでした。奥様に伺った所、昭和61年12月16日早朝散歩に出られて、自宅近くの道路にて自動車に跳ねられて入院。9ヶ月程で退院され、自宅にてリハビリをされて居られた由、自宅では快方へ向われて居た所、また9ヶ月程で再入院され一進一退の病状にて、平成2年11月10日不帰の人となられてしまった様です。1週間程して、奥様より新田氏へ電話が有り、亡くなられた知らせが入り、私と二人にて御自宅へ御線香をあげ、御冥福を御祈り致した次第です。

藤田さんは大正8年12月16日に軍人家庭で御生まれになったと聞いて居ります。

私と藤田さんとの出会いは、私が昭和15年4月に我が山岳部に入部して、当時の予科理科の教室が駿河台に有り、一階の廊下の突き当りは山岳部の器具の倉庫になっていました。道具の整理の御手伝いをしていた処、ザイルの手入を教えられたのが始まりでした。まだまだ1年部員等はザイル等さわれるものではなかったのですが、藤田兄は「命の綱なのだから気を入れて手入する様に」と大変厳しく指導された事を思い出します。

また昭和16年9月4日よりの穂高の生活が有り、4日の夜行にて新宿を出発、5日島々より中伝～発電所取入口～岩魚止茶屋にて昼食後徳本峠を越え白沢出会～徳沢小屋着17時30分、6日早朝徳沢小屋を出発して涸沢小屋～穂高小屋へと向いしが、小屋手前より雨となり徳沢へ引返す。7日天候が思わしくないので、奥又出合い～徳沢～上高地～徳沢と荷揚げに1日を過す。8日天候が回

復したので、徳沢小屋～涸沢テント場～北穂高滝上～尾根取付～北穂南峰～涸沢コル～テント場～横尾岩小屋と夕刻17時50分頃となったので、徳沢小屋へと思いきや、リーダーの藤田さん曰く、今晚は入来、上関さんのケルンの前で寝るとの事。村田と顔を見合わせたか、後の祭り。とっとと先へ行かれたのには参った思いが有りました。山で亡くなられた入来、上関さんの話を一晚中間かされた次第で、友を思う優しい心根があったのだと考える次第です。

また昭和18年5月の奥又での生活で、宮本と私で前穂四峰のバットレスの正面ルートに挑戦し、今一步で乗越す所のオーバーハングで宮本が落ちて私と宙吊りになり、九死に一生の思いで下山して帰京しました。当時の先輩で、神山勉さんの御宅が京成関屋の丸三製紙の工場を御家族でやって居られ、色々と御世話様になり、また報告等で出掛けて居りましたがその工場で、藤田さんも働いて居られました。今で言う処のアルバイトでしたのでしょうか。製紙工場と言うのは鼻をふさぎたくなる様な臭いが立ちこめているのですが、藤田さんは機械科出身でもあるので、点検等をもくもくとして働いて居られました。

夕刻工場も終業し、神山先輩に山行の御報告等をした処、頭から火の出る様に叱られ、私達は涙の出る程怒られ、お前達は入来、上関達の後に続くのかと申されました時、藤田さんは私達を呼び出して、神山先輩は御前達が可愛いから叱るのだよと順々と悟され、藤田さんの優しさにまた涙でした。藤田兄は大変気強い一面優しい面も持たれ、我々後輩の良き兄貴であったのでした。

色々と思い出は尽きないのですが、またの折りとして、平成3年3月8日に藤田さんの納骨の儀に新田氏と共に参列致しました。

場所は京王線高尾駅より徒歩30分程の高尾霊園と言う墓地ですが、岳人にふさわしい山の中で見晴しの良い霊園であり、心安らかに永眠されん事を願って筆を置きます。

合 掌

平成3年5月31日

初見一雄先輩

昭和26年経済卒 石坂 昭二郎

初見先輩、初つぁんは私にとって天皇陛下と呼ぶにふさわしい象徴的存在であり、わが日大山岳部は、初つぁん抜きには語れないと思っている。

日本大学山岳部が、いつ頃出来たかは、はっきりしないようである。しかし戦後“山日記”が1949年版より復刊され、1950、1951年版の3冊は、神山さんを中心とした、金坂、崎田、千谷、津村、村田、野田、河内さん等が編輯された。1950、1951年版には登山団体一覧表なるものがあり、その1950年版は創立大正13年（1924年）、1951年版には大正14年とある。いずれにしろ、その頃に山岳部が出来たものと考えられる。

“部報”1号が1930年10月から1932年9月までの記録をまとめて1932年12月に発行されたが、創立から1930年9月までは、正式な記録としては部に残されていない。断片的にしか知り得ない。その後“部報”の刊行は中止となり、より内部的な機関誌として、“岳人”1号が1936年12月に出版された。今、手許にないので、正確に伝えられるか心もとないのだが、メモノートを頼りに、創立者の豊島拔さんがその号に寄稿した“想ひ出るままに”と題した文章を記してみよう。

当時の山岳部は大学当局の公認を得るためにも、出来るだけ盛り沢山にしておかねばならないと考え、冬期にはスキー、スケートの方にまで手をのばして活躍するといった趣意書を作成した。その中にも運動の結果か、時勢に対して当局が漸く眼を向けてきたのか、とにかく予算会議にも招集されるようになり、公認問題は解消した。その当時の部のレベルは一本のザイル、一張の天幕さえ持っていない、天幕は欲しいと思っても、ザイルに関しては使用法もザイルの必要さえ痛感しない程度の認識不足であった。公認問題が解消して、いよいよひたむきの精進が出来るようになると、今迄の幼稚さが恥かしく思われてきた。そして自ら山と自然とを対象とにして登高という行為を目的とする“山登り”と、人と人との競技を

目的とすべきスキー部（山スキーは別である）、スケート部というものは、本質的に別個のものであらねばぬ事におくれげながら気がつき、そこで第二期運動としてスキー部の独立ということが問題となり、部員総会の承認を得て、大学当局とは何等いざこざなしに、極めてスムーズに山岳部を母体としたスキー部は三沢竜雄氏を主脳とし分離独立して、大学内に一つの公認された地位を獲得したのである。スケート部は流産に終る。これは本格的にスケートをやる人がいなかったから、やむをえないことだった。

その頃進歩的な尖鋭分子として、初見一雄君が入部した。初見君の真剣な性格と、真面目な宗教的とさえ見える山の情熱と研究は、ぐんぐんと部全体を高度の自覚に導いて、大きな飛躍をなさしめた。と同時に三崎町、駿河台に別れ、文科、理科、医科予科等を包含する膨大な山岳部になった。—中略—

昭和3年12月から翌年1月にかけての大沢小舎生活は、登高という点においてこそ、針ノ木岳、蓮華岳への放射状登山を目的とただけで、画期的な仕事という訳にはゆかぬにしろ、吾々の山岳部としては初めてのほんとうに大きな計画であった。それだけに参加部員は、何れも優秀な人達であった。初見、石井蔵之助、毛馬内次男、葛原合二、それに僕等は、夏山を終ると直にこの準備工作に没頭し、幾度か研究会を開いたし、新雪の来る前も、来てからも準備のため何回も現地へ向った。この計画の内容はすべて初見君の腹案であったが、その計画は決して無茶でもなく、極めて合理的に出来ているものと僕は考えた。そしてここ迄に飛躍した事がどんなに嬉しかったか、非常な喜びで初見君の説明を聞いたものである。—後略—

これももう一つはっきりしないのだが、初見さんが入部したのが昭和2年となると、2年部員で部をリードした豪のものということが出来よう。初つぁんがいつ頃から山登りをやっていたのか、まだ調べがつかないのだ。初つぁんの晩年、私も毎日が日曜日となって、呼ばれたり、こちらから出掛けたりして、昔のことどもを聞き出そうと思ってはみたのだが、千曲錦のお湯割をやっているうちに、いつとはなしにそんなことはどうでもよ

くなり、四方本に囲まれた、十畳程の居間の空間が、常さんの小屋にでもいるあんばいで、ただじわっとはまりこんでいただけだ。初見さんが60歳のときに出版されたほとんど書きおろしに近い“すこし昔の話—千島、樺太、信濃—”のなかでも学生時代の山登りを語ることは少く、豊島さんのことにくらかふれているだけのようだ。

厳冬期の穂高初登頂にしのぎをけずった、昭和5、6、7、8年頃が、初つぁんとしても油の乗りきったときだったろう。この頃知りあった人々のなかに、終生変わらぬ友情を示された松高の数井保太郎さん、六高、東大から日大教授となり、初見さんが山岳部長として推薦した清田清さん等がおられる。この当時のことは関東学連報告1～3号、日大山岳部部報1号等によって知られるところである。

登山歴にもある通り、昭和6年12月から7年1月にかけて行われた槍穂高の縦走は、学習院加藤泰安、立教堀田弥一氏等のパーティーに先行され、惜しいところで、初縦走の栄をのがすことになる。このことには流石に残念な気持ちもあつたらしく、珍しく口にのせたこともある。この時のメンバーに広田、土肥さんを加えられなかった不運が初つぁんにあとあとまでつきまとはいかなかったらうか。

ここに農林省森林総合研究所十日町試験地の積雪図がある。それには観測開始をした大正7年から平成2年までの記録が図形化されている。それでみると、昭和5、6、7、8年というのは、近年に匹敵する積雪の少ない周期にあたっている。十日町の積雪が、北アルプスの雪量とどう関係があるかななどということは、専門学者の向後の研究に待ちたいところだが、好運が当時の登山者の上にあったことは間違いあるまい。昭和9年4月9日、まれにみる豪雪をたくみに利用して、積雪期池の谷左俣からの剣岳初登頂に成功した、広田、渡辺さんのことなども考え合わせると面白い。

日大を卒業して、北大に行つてからの初見さんの登山歴については目下調査中で、今ここには残念ながら書くことは出来ない。しかし在札6年間の遊学時代、山登りを超越したような行動のさまは、“すこし昔の話”をひもとくことによって浮かび上つてこよう。後年平山善吉やそれに続く西田勇一、深瀬一男、村石幸彦、宮原龍、

森田博正、川口洋之助、関孝治等の南極行を推進し、それがグリーンランド行、北極へと続く過程において、池田錦重、早乙女次男、小島一男等を後押し、その間ヒマラヤ登山隊にも肩入れした大きな気持は、その当時つちかわれたものだろう。その連中が初つぁんの下落合に集い散じ、松高や北大の人達もおでん鍋を囲むといった盛況であった。

初見さんが生活に困っていると聞けば、いそいそと募金し、眼の手術をするのでお金がほしいといわれると、たちどころに何がしか集まるという具合だった。新品のベッドを届けた男もいたし、補聴器のスペアを調達したものもいた。その辺の初見さんの人をみての呼吸は見事なものだった。区からの家政婦さんが週何回か通つてきて部屋もよく整理されていた。「酒は千曲錦の四合瓶、外に空瓶があるからそれを持っていけ。納豆は丹精、マグロは赤身のバチ、牛肉は100g 1,000円以下のは駄目だぞ」などといわれて、ほいほい買出しから戻つて冷蔵庫を開けると、同じものが入っているのである。初つぁんのスペア精神といつて、平山や深瀬などとよく感心したものだ。

そんな初つぁんであつたから、私は1989年の暮れにネパールに出掛けても安心しきつていた。30日には家のカミさんに、長岡の妹のところから送つてくる新巻鮭、筋子、鱈子、小千谷の餅、それに焼のり、リング等を届けてもらつていた。1990年1月末に帰国して電話で報告したら、写真を見せてほしいというような妙に人なつこい話声で、それからよく電話がかかつてきた。私は2月の終りに、田舎のばあさんのお供でまた東南アジアに出かけ、帰つてからも何となくぐずぐずと顔を出しそびれていた。それだけに火事の知らせを受けたときは愕然とした。平山や池田のところにも、よく電話がかかつていたとあとで聞いた。そんなことで入院先の東京女子医大にも転院先の木村病院にも、物いわぬ初つぁんがせつなくて割合足を運んだ。動かぬ初つぁんと付添婦の橘川さんは誠に気が合うようで、初つぁんは大したものと思つたりもした。1週間に1回は必ず顔を出される数井さんとは何回かお会いしたし、北大の小枝さんのこともよく聞いた。それにしても忘れられないのが、長姉のマリ子さんのことだ。初つぁんより一つ歳上だというのに、

修道服姿でさっそうと通ってこれ、「一雄が皆さんに、こんなに親切にいただけるなんて思ってもいませんでした。勉強しない子で…」などといわれるとマリア様の御声を聞いているようで、ただ頭がさがるばかりであった。

雑司谷の納骨式では娘さん三人ともそろわれて、何となくほっとしたものだ。マナスルに行く前、箱根底倉の梅屋の離れで当時そこで生活されていた皆さんに出合って以来だが、その時のことなども話題に出来て、私としては上出来のことだった。だが今尚、娘さん達には初つおんを許す気にはなれないといった空気がゆれているようだった。

とにかく4,500軒はあったといわれる、長崎アトリエ村を中心とする貸家を、初つおん一人で飲んだものではないとはいいながらも、そのことごとくを人手に渡し、「下落合の土地もお寺の地所だし、今住んでいるところも生きている間だけなんだ」と、ガードもかたく語る晩年の初つおんは、さみしそうだった。それでも初つおんの遺産関係にもくわしい数井さんや平山の話によると、スペア精神のたまものか、何がしかのお金が娘さんや前の奥さんに渡ることになりそうである。

また初つおんの本を目当てに生前通った人は成瀬岩雄さんをはじめ数多いと思われる。私などの新参ものが、時に本のことを口にする、誰それにやることになっているのだ、とこれまた先手を打つ初つおんであった。火事で焼けた玄関先にぬれた文庫本が一冊、私はそれをそとひろってきて、せめてものなぐさめにしている。本のことが出たからとりとめもない話のしめくりに、一つだけ披露しておこう。

それは初見さんが、上高地で親しんだ常さんに自らの姿を重ねてそれぞれ異質の三つもの常さん伝を書き上げたように、最後まで書くことに執念をもやしていたのが「松方三郎―後藤信夫の時代―」というものだった。河上肇に師事した松方さんが、父正義公に遠慮してか社会主義関係のものを書くときに使っていたペンネームだという。「後藤信夫がよく執筆していた“社会思想”は慶応の図書館にしかないぞ」とか、「石坂中江丑吉という人物を知っているか、鈴江言一の孫文傳をさがしてこい」と、もうこちらは目を白黒させるばかりである。な

んで後藤信夫なのか聞いた気もするのだが、今は頭に残っていない。

何しろ初つおんの考証ぐせは、あの飲んべいの初つおんからは想像も出来ないのである。

そんな初つおんでも身内のこととなると気がゆるむらしい。会報26号に広田さんの追悼を書かれているが、そのなかで横手のガランの谷で消息をたった浅倉さんの死亡年月日（昭和10年2月11日ではないか）も浅の字も間違っていて記しているようだ。これは多分山岳部の会員名簿の故人欄をうのみにしてのことだろうが、後輩としてはもう少し身内のことにも目を向けてもらいたかったとの思いも強い。神山さん時代の人達の気持ちのなかにも何となしそれがあるように思われる。

創設者の豊島さん、広田さん、神山さん等、多くの諸先輩、はたまた若くして山に召された仲間達と、天国で再会した初つおんは、「生バチマグロと千曲錦を買って来い」とぼつぼつ吼えはじめているのだろうか。

故人の冥福を祈るばかりである。

1991年6月6日

略歴

- 1909年1月1日 アメリカで働いて、お金を貯めて帰ってきた真摯で敬虔なカトリック信者、六歳、こうの長男として東京にて出生。暁星小学校、中学校にて学ぶ。
- 1927年 日本大学入学
- 1933年 日本大学経済学部卒業
- 1937年 北海道帝国大学農学部農業生物学科卒業。引き続き農学部副手として2ヶ年間勤務。以後広島県江田島所在飯野農場にて豚を飼うこと2年、爾来在京して今日に至る。
- 1943年 早川種三、三田幸夫氏らがやっていた紀屋（米国から特殊な塗料の輸入、塗装工事の請負、一般商品輸送等）を引受ける。丸ビルから下落合と事務所は移転したが、焼けるまで紀屋工業の看板が門柱にあった。ペンキ屋は昭和30年代頃までで、その後は南極等の防寒服作りに熱中し、昭和50年代の終りまで仕事をしていた。また料理にもうるさく、特製だしの赤銅のおでん鍋や初つおんコンブは知られている。
- 1969年8月 “すこし昔の話” 茗溪堂刊、出版。

- 1975年6月20日 母こう91歳で他界
- 1986年1月17日 後妻月子没
- 1990年3月25日 夜、自宅全焼。2階に下宿させていた
学習院大生に助け出され、東京女子医大熱傷救急セン
ターに収容。当初は意識があったようだが、火傷治療
の過程で植物人間となり病状固定。
- 1990年5月21日 板橋区木村病院に転院
- 1991年2月6日 同病院で帰天
- 1991年2月7日 聖心女子大学聖堂で葬儀
ペトロ初見一雄 82歳。闇に光を、悲しみのあると
ころによるこびを、なぐさめられるよりは、なぐさめる
ことを、理解されるよりは、理解することを、愛され
るよりは、愛することを。
- 1991年2月22日 納骨
墓地は雑司谷。1種8号28側23番。
六歳、こうが教主降生1924年に建てた見事なもので
ある。尚、月子さんの墓は、別につつましくすわって
いる。池田の設計という。
- 登山歴（日大山岳部時代のもの）
- 1927年夏 中房温泉から燕岳（すこし昔の話）
- 1928年4月23日～29日 春の白砂山（4/26）と野反池、
大高山（4/28）、法大角田吉雄、西川国彦、日大初
見一雄、人夫山本藤作。4月25日、白樺のまばらな林
の中にテントを張り、樺の葉を厚く敷き詰めて野反池
スキー生活の第一夜を送る事にした。太い白樺の側に
薪を敷並べた焚火は景気のいい焰をあげ始めた。火気
の為に雪は落込んで行く。一方水を破って水を求めに
行く初見君の鉈を腰に、スキーを飛ばす姿も新しい喜
びの一つであった。（角田 上越国境）
- 1928年夏 徳本峠を越えて上高地へ。単独行。常さんと
の出会い。（常さん小伝）
- 1928年7月28日～30日 前穂北尾根。
法大高橋栄一郎、初見、人夫大和田由松。（山想3号）
- 1928年9月22日～27日 蓼科山
法大角田吉夫、角田喜久雄、初見。（山想3号）
- 1928年12月9日～16日 燕岳スキー一行。
法大角田吉夫、初見、人夫近藤一夫。（山想3号）
- 1928年12月～1929年1月 大沢小屋生活。
初見、石井蔵之助、毛馬内次男、葛原合二、豊島弘。
（岳人1号）
- 1930年3月31日 奥穂高岳。
初見、平澤一久、酒沢より。（岳連報告3号）
- 1930年4月29日～5月2日 甲斐駒ヶ岳。
初見、大林第三、西山毅、濱田米規、櫛引鉄太郎。
（岳連報告1号）
- 1930年5月14日～26日 穂高岳。
初見、葛原合二、人夫内野政之助。（岳連報告1号）
- 1930年7月20日～29日 上高地生活。
初見、米沢直治、木代不二夫、松山好雄。（岳連報告
2号）
- 1930年11月18日～23日 初冬の穂高。
初見、大林、22日本谷偵察。
- 1930年12月16日～21日 白馬岳。
初見、葛原、土肥信義。18日頂上へ。
- 1930年12月21日～29日 南小谷スキー合宿。
初見、櫛引、本城敏之、濱田、平野弘毅、西山、
広田賢治、武藤正弘、坂本貢、小林太郎、杉浦博二、
松山、菊地定男、横井英信、宮川邦治、大向里海、
岸徳彦、篠原三郎、湯地富雄、清水四郎、吉村。
- 1931年1月8日～18日 奥穂高岳。
初見、広田、土肥。16日登頂。
- 1931年2月8日～12日 硫黄精錬所行。
初見、土肥、武藤。
- 1931年3月12日～21日 熊之湯スキー合宿。
初見、櫛引、宮川、杉浦、広田、坂本、金子二郎、
安波利三郎、平野、菊地、横井。
- 1931年3月22日～4月4日 前穂高岳。
初見、櫛引、宮川、安波、松山、東医笹井嘉雄。3月
28日岳川谷より水飲沢を登高して登頂。
- 1931年6月3日～14日 初夏の穂高。
初見、毛馬内、葛原、武藤。3日西穂、7日北穂北壁、
10日北尾根。
- 1931年7月4日～15日 穂高生活。
初見、土肥。
- 1931年7月25日～31日 穂高生活。
初見、西山、本城、濱田、安田敏夫、宮崎基一、
皆川四郎、米沢、藤沢平八、窪田宗英。

1931年8月3日～14日 剣岳生活。

初見、土肥、安田。6日剣岳、8日ハツ峰上半、9日三ノ窓チンネ、12日チンネ。生活終了後初見は広田の家へ遊びに行く。電車の中で、土肥と別れる。非常に込み合う中でろくろく言葉もかわせなかったのはさびしかった。

1931年11月29日～12月10日 初冬の穂高。

初見、毛馬内、土肥。土肥足痛に苦しむ。

1931年12月25日～1932年1月23日 槍ヶ岳・南岳、北穂高岳、奥穂高岳。

初見、毛馬内、西山、濱田、武藤、菊地、樫引、人夫杉本為四郎。1月1日槍肩ノ小屋は前に使用せる人ありて簡単に入るを得たり。6日、快晴無風。北鎌尾根へ1隊、濱田、武藤、人夫杉本、槍ヶ岳へ1隊、初見、西山の兩名は北穂高へ向う。小屋(6:50)、南岳(7:50)、南岳下(8:40～8:50)、大キレット(10:10～10:20)、大キレット終り(11:15～11:30)、北壁を登る。北穂高頂(14:55～15:10)、唐沢岳との鞍部(17:15)、池ノ平(18:15～18:30)、横尾岩小屋(21:00)、徳沢小屋(23:45)。冬期には全く例外の快晴、且つ無風の状態なりき。登攀は困難なる個所なし、氷の所予想せるより多し、これは12月10日上高地に約半日豪雨あり、これが尾根迄透りて凍りたるまま残りたるならん。時間の空費を極度に恐れたり。大キレットは予想より簡単。我等より前行せし縦走隊は皆、本谷を通過せしもの如し、本谷カール底に点々たる足跡を眺めたり。酒沢岳との鞍部に至れば既に日没なり。遠く日本海方面は真紅に燃え壮観なりき。穂高小屋行を断念して下る。直に輪カンを着け池ノ平目指して真しぐらに飛ぶ。積雪状態は何等雪崩々落の危険を感じしめざりき。ただ北穂高沢上部に一本跡を止めたりき。池の平にては既に闇となり。燈火を用ひて徳沢小屋迄歩みたり。輪カンなれば時間の浪費多大なりき。9日西山、濱田、菊地、樫引帰京。11日初見、毛馬内、武藤、穂高小屋へ。14日奥穂を経て前穂との最低鞍部まで。18日再び前穂に向かも天候悪化のため引返す。

1932年2月6日～9日 富士山。

初見、林幹夫、坂本、菊地、森泉。8日頂上。

1932年3月27日～4月18日 南岳、奥穂高岳。

初見、林、森。3日南岳、5日北穂高へ行かんとせしもファイトなし。出合より引返し、岩小屋で昼寝をする。夜、内山、数井両氏カンカンになってくる。9日穂高小屋へ、11日奥穂高頂上を経て前穂高へ向うも引返す。

1932年5月8日～11日 富士山。

初見、水野依信。

1932年12月22日～29日 熊之湯スキー合宿。

初見、広田、葛原、森、林、坂本、御園幹雄、村越英作、窪田、岡宮由太郎。

1932年12月31日～1933年1月10日 北穂高岳。

初見、広田、森、懸信男。3日登頂。

1932年11月 日本山岳会入会(会員番号1396)

1988年11月 日本山岳会名誉会員

窪田先生を偲ぶ

昭和27年経済卒 芝田 稔

私が、六尺和尚(窪田先生の工業学校での仇名)に出合ったのは、旧制の東京工業学校、1年に入学の時である。足立から神田錦町(現在は目黒区駒場)にあった学校に通い始めた。緊張し切っている私の目には、ずいぶん身体の大きな、余り笑わない先生だな!と言う印象であった。

その頃、先生は奉職3年目、昭和16年の事であった。そして私が3年生になって機械設計の授業を受けるようになり、最終学年では担任としてその風貌に接するようになった。

授業の折り折りに、上高地や穂高の四季折々の話、親から貰った参考書代が、登山靴やスキーに化けた話。当時私は山に興味を持って、時々近在の山に登って居り、先生の山の話は深く印象に残っている。

当時は学徒動員で、三八歩兵銃を持って富士山の裾野での野外教練など、その様な毎日の時代であった。

先生のニックネームの六尺は“六尺豊かな大男”すぐ

わかるが、何故和尚なのかは判からなかった。それが昭和20年3月10日の東京大空襲に依り神田の学校も焼失し、翌日登校した4~5人の同級生に担任の窪田先生の住居も焼けたと聞いて、皆で焼跡を訪ねたずね歩いて、本所の桃青寺にたどりついた折、六尺和尚が防空壕からのっそり出て来られ、大変喜んで下さった。そこで始めて禅寺の住職をされていると知った。その和尚と言うニックネームは、先生が亡くなった後も卒業生は口にしていく。

私に日大の機械科をすすめたのは和尚さんで、入学後、故神山先輩によって山岳部に入部したのだが、戦前の部員名簿が部室にあり、和尚さんの名前を発見、山岳部の大先輩である事を知る。ある日、故神山先輩は和尚さんについて「古い先輩と一緒に山行の機会は無かったが、大変厳しい方だったと記憶している」と話して居られた。

その後、私が母校の同窓会役員を引受けるようになってからは、窪田先生と逢う機会も多くなり、さまざまに薫陶を受けるようになった。また山岳部の事故の時など心配されて、色々尋ねられたりした。いつも先生は毎日校務が大変多忙で、夜遅く迄学校にいる事が多かった。

ある日、私に、今度山岳部長になった清田さんとは昔の知人で是非逢いたいから、と言うので御案内した事があった。40数年ぶりの再会と言う事で、大変盛り上がり、深夜迄歓談して居られ、なかなか終宴せず本所のお寺(自宅)に送り2時頃帰宅したのも、昨日の事のように思える。

故三好勝彦君と共に寄付を戴きに伺った時など喜んで、うちの学校に来てくれないかと言われ、山岳部出身の先生希望者はいませんかとよくきかれた。時には会議の終わりに、これ少ないけれど部に持って行ってくれと言って金を預かったりした事も何度かあった。

思えば、最後の明治の人であった。惜しい方ではあるが、齢82才を考えれば、充分世の中につくされて、去って行かれたと、感謝しつつ追悼したいと思う。

住持妙心當山十四世玉堂英和尚大禪師

合掌

平成3年5月

相良先生を偲ぶ

昭和14年建築科卒 津村 利男

本会特別会員相良次郎先生が、平成3年4月29日亡くなられた。

新聞紙上では、元都立大学、青山学院大教授英文学専攻、心不全のため自宅で死去、86才、サマセット・モームの研究者として知られる、とある。

先生は、昭和9年私が工学部予科理科山岳部に入った頃の山岳部長であった。その後昭和14年日大騒動で、12年間動められた日大を去られた。

当時先生は目白にお住まいだった。我々部員が大勢でよく夜おそくまでお邪魔し、今思えばずいぶん先生の勉強の邪魔をし、また奥様に御迷惑を掛けたものだと思う。

我々新入部員は、8帖だったか、6帖だったか、本のぎっしり詰まった書齋で、本を片付けそれぞれ各自の座り場所をつくり、お話を承ったのだが、その膨大な本の量には、ただただ驚ろくばかりで、学者の書齋に初めて伺った私には、あれだけの本を読むとは、先生になるということは大変なことだと感心した。その思い出の目白のお宅が、どの辺りだったか今思い出せない。私が先生の警咳に接したのはこの時が初めてである。

先生は小学校から高等学校を九州で過ごされ、父君は軍人。先生の言によれば「度し難い程の山きちがい。小さい頃から山に連れていかれた記憶は数知れない」相良次郎画文集「遙かな山遠い風」より。

先生が実に素直に山に行かれる素因はこの辺りに発しているのではなからうか。

父君の任地の関係で内地は勿論、朝鮮、北海道まで足をのばし、それぞれの土地でこまめに山へ登ったり、スキーを楽しまれた。スキーを知ったのは大正13年、父君の転任で旭川に渡られた頃だったとか。

スキーの先生は馬丁の子で、2日目にクリスチャニア、3日目にテレマーク。勿論、理論も何もない特訓に次ぐ特訓、と前掲の文集に述べられているのは、いかにも軍隊式で面白い。その後剣沢生活で、テント場の上の雪渓で、ゾンマーを迂らせている先生のスキーは矢張りその

当時の馬丁の教えが残っているかに見えた。

先生はスキー部の部長も兼ねておられ、冬はスキー部に行かれる関係で、先生のスキーはよく覚えていないが生来の器用さと、年季からいっても、名手と言うべきだろう。

先生は小さい頃から山に親しんでおられたせいか、山での動作感覚は地についていた。あの独特の漂々たる風貌は、長い間の山とのふれ合いから出たものと思われる。新入部員歓迎ハイキングで、丹沢を、渋沢から中央線の与瀬へ抜けたことがある。米沢、広田さんの大先輩に迎さん（鈴木克己さん）を加えた錚々たるメンバーである。先生はおくれて参加されたが、恰も山窩の山飛びを思わせる早さで先行の我々を捕え、一服しながら宵の明星の話をされた。どんな内容だったかは残念ながら覚えていないが、あの暁の尾根をバックに休憩される先生には、大人の風格があった。

戦後先生の家は火災にあわれ、その後現在の処に家を建てられた。その事を相当後になって神山君から聞き、御見舞と戦後の御無沙汰をお詫びに伺った事がある。玄関に入るなり、いきなり大小様々のカンバスが壁面を埋め、独特の油の香がして、ちょうど画家のアトリエに入った様な感じだった。

先生の絵は、よく展覧会で見る様な大層な絵は見当たらない。大変清々しい画風である。よく絵はその人をよく表すと言われる。先生を知る者ならなる程と納得する絵である。一度銀座の画廊で個展を開かれた事があったが、先生の絵は、都会の中でも、田園的雰囲気にも囲まれた、広い画廊がもしあったら、そこが一番ふさわしく、一層みごとだろうと思った。

長い間お邪魔し、四号の浅間山の画を頂いて来た。帰り際に書斎をのぞかせて頂いた。かつて目白のお宅で見た様に、あふれんばかりの書物の中に、フチの少し焦げた本が並んでいるのも痛々しかった。それにも増して、貴重な論文、文献を無くされた事は、学者としてさぞ無念だったろうと思う。然しこの事について先生は、一言も未練がましい事を仰しなかった。

北軽井沢の山荘におられる頃、絵具を持って一度遊びに来なさいと、お招きを受けたことがあったが、学生時代に散々手古摺らせた私が、今度は絵でお世話をかけて

は申訳ないと、立すくんでいるうちに、先生は引揚げられさてしまい、遂に弟子入りの機会を失ったのは残念でもある。

此の追悼文を書くにあたって、先生の画文集を丹念に読み返したが、その中にバイオリン、フルート、チェロを楽しまれたとあり、また水泳、テニス、剣道に乗馬。学者と言え、終日書齋に閉じ籠り、ふ厚い眼鏡をかけた風采が一般的なのに、先生に限って、その一般的風采とは縁がなかったらしい。常に自然界に躍り出て、ゆうゆう泳ぎ廻り、人生を最大限に楽しんだ人の様に思われてならない。

私は乾いた尾根で休んでいた。先生が来られ、おだやかな口調で、「君のうしろに蛇がいる。咬まれると痛いですよ」と。見れば相当大きなマムシだった。その後称名滝の近くで、重いリュックを橋の欄干に乗せ一休みしている時、すぐ脇にリスが木の枝につかまって動けないで喘いでいた。よく見るとその下にマムシが狙っていた。咄嗟に咬まれると痛い蛇を思い出した。あの嫌われ者の蛇にさえも、先生の眼は、自然界の一員としての愛情を持って居られる様にさえ思われた。こよなく自然を愛し、その中にどっぷりと漬っていた先生には、蛇と雖も友達だったのかも知れない。

こういう先生に私達は山岳部員の道を教えられた。

私が恩師の追悼文を書くのは僭越であるが、事情によりお引受けする事になった。文中の失礼平に御容赦を願います。

1991年5月25日

森田 博正氏 平成2年9月3日
藤田 達夫氏 平成2年11月10日
初見 一雄氏 平成3年2月6日
窪田 宗英氏 平成3年2月26日
相良 次郎氏 平成3年4月29日

登山計画の近況

(桜門山岳会会員)

パミール登山隊1991 - 行動報告 -

昭和43年経済卒 中村 進

登山隊名称 桜門山岳会パミール登山隊1991

Ohmon Alpine Club Pamir Exp. 1991

目 的 1. コルジェネフスカヤ峰(7,105m)と
コムニズム峰(7,495m)の登山

2. 高所登山における体力の評価・研究

期 間 1991年7月10日～8月9日(30日間)

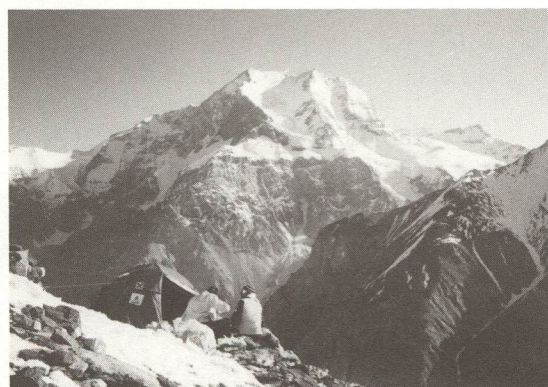
メンバー L.中村進、M.今野善郎、SGM.中村省爾

今野君は55年卒、1978年の北極点、80年JAC 学生部ブリクバント峰、81年ヒマルチュリの隊員でした。現在は鹿兒島で幼稚園の園長をしています。年齢は34歳。

中村省爾さんは3年前私とチョモランマに登った方で、1975年ダウラギリ4峰、77年K2の登頂者です。国内でも谷川岳一の倉衝立岩冬季登攀、さらに氷壁に幾つもの初登記録を持ち、今回のスペシャル・ゲスト・メンバー、47歳の現役のクライマーです。

<計画の趣旨>

今回、パミールの登山は、アルピニズムの世界においては何らアピールするものはありませんが、私達にとっては未だ訪れた事のない未知の地域であり、登山を通じてソ連の山や社会をじっくり観て、さらに自らの世界観を深めたいと思います。



▲コルジェネフスカヤ峰(7,104m)
コムニズムC1(5,100m)より

また、私達3名の平均年齢は43歳です。年齢、体力、技術等をよく考えながらレベルに合った私達なりの高所登山を工夫し、安全を第一に心掛け、山での充足を求めたいと思います。

“体力の続く限りチャレンジして行きたい。登れても、登れなくても山は、自然は私達を失望させない。何よりも大きな喜びは、山という大自然の中で身体を動かすと、全身の筋肉、全神経が活発に活動し始め、私達の心を、体を、さらに精神をも高揚させてくれる。”

こうしたチャレンジにより自らの体力、気力が再認識させられ、そこに人生や仕事に対する新たな意欲や自信が生まれてくるものと思います。

私達は、いま新たなスタート・ラインに立ったところ
です。(1991年6月 計画書より)

<行動概要>

今夏のパミール国際キャンプでは、モスクビンBCに入った総登山者数、約90名。半数はソ連国内の各共和国からの登山者で、残りの45名程が外国人登山者でした。

日本からは、私達を含め4パーティー計14名が参加し、最高峰のコムニズム(7,495m)とコルジェネフスカヤ(7,104m)を目指しました。

結果的には、2峰に登頂した日本隊は私達と他の1隊(この隊のリーダーと隊員1名は、プレのカンチェンジュンガで8,000mまで登り高所順化が出来ていたため、登山期間内でレーニン峰も含め3峰登りました)だけで、別の2隊は日数切れでコムニズムにはアタック出来ませんでした。

尚、今野OBは、コムニズムのラッシュ・アタックに際し、高所適応に不安があり、相談の結果、安全を考慮して自らアタックを取り止め、ドシャンベ・ピーク(7,005m)を往復しました。

23年前に垣間見たソ連は、“早く通過したい”という印象でしたが、今回のパミールでは、ソ連のトレーナー達と和やかに、友好的な雰囲気の中で楽しく登山が出来ました。

パミールの山々にもベレストロイカの風が爽やかに吹いていたように感じました。

<登山日程>

7/10 晴 東京→モスクワ

7/11 晴 モスクワ→オーシー→アチクタシ
BC

7/12 曇～雨 打ち合わせ、登山準備



▲コムニズム峰(7,495m)
コルジェネフスカヤC3(6,100m)より

1. コルジェネフスカヤ峰(7,104m)

- 7/15 晴～雪 荷上げ
(BC4,200m⇔下のC14,900m) 今野休養
- 7/16 快晴 順化行動(BC⇔C1) 全員
- 7/17 曇～雪 全員休養
- 7/18 快晴 C1(4,900m) 入り。
- 7/19 快晴 荷上げ(C1⇔C2)
- 7/20 晴～雪 C2(5,600m) 入り。夕方より降雪のため、夜10時、上のC2(5,800m)へ避難。
- 7/21 曇～雪 6,000 m付近までルート偵察後BCへ下山。
- 7/22 雪～晴 BCにて全員休養。新積雪15cm。
- 7/23 曇～雪 C1入り中止して停滞、休養。
- 7/24 快晴 アタック開始(BC→C2) 全員。
- 7/25 晴～曇 C3(6,100m) 入り。ツェルト使用。
(この日、大きなアイスブロック雪崩が発生し、C1-C2間でアルメニヤ隊員1名死亡)

- 7/26 快晴 コルジェネフスカヤ峰(7,104m) 全員登頂。登頂後C2へ下山。
- 7/27 晴 C2→BCへ下山。
- 7/28 快晴 休養
- 7/29 快晴 休養

2. コムニズム峰(7,495m)

- 7/30 晴～曇 C1(5,100m) 入り。
- 7/31 晴～雪 プラト-C2(6,000m) 入り。
- 8/1 風雪 停滞。視界50～100 m。
- 8/2 快晴 C3入り。今野不調のため6,500mにキャンプ。
- 8/3 快晴 アタック。中村、中村(省)コムニズムに登頂。今野ドシャンベ・ピーク(7,005m) 往復。全員プラト-C2まで下山。
- 8/4 晴 C2→BC→アチクタシ
- 8/5 晴 アチクタシ→オーシー→モスクワ
- 8/6 晴 早朝モスクワ着。
- 8/7 晴 モスクワ滞在。
- 8/8 晴 モスクワ→東京
- 8/9 晴 帰国。10時40分成田着

(1991年8月16日 記)

-尚、詳しい記録は次号に掲載の予定です。-

チョー・オユー登山隊1991

計画概要

隊の名称 シルバータートル卓奥友峰(チョー・オユー)登山隊1991

目的

- I. 中国チベット側 西北西稜からの卓奥友峰登頂
- II. 高所登山における中高年者の医学的調査研究
- III. ヒマラヤの環境破壊実態調査と登山隊の環境保全努力と実行

- ① 湾岸油田炎上の影響調査
- ② 登山隊の装備とゴミの完全撤収実行

期間 1991年8月下旬～10月上旬

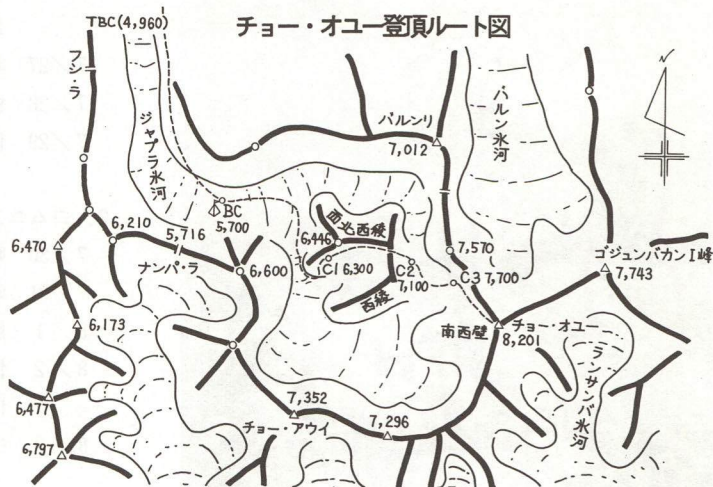
隊の編成	日本隊員	15名
	ネパール協力員	11名
	中国登山協会派遣協力員	連絡官 1名
		通 訊 1名
		運 転 手 1名
		合 計 29名

メンバー

- (隊長) 神崎忠男
 (副隊長) 関孝治
 (登攀隊長) 池田錦重、
 (隊員) 遠藤京子、石川富康、渡辺玉枝、
 根津皖一、本間堅一、大山昇、
 三浦充哲、山平靖、永田周子、
 成田蔵人
 (ドクター) 大城泰、堀井昌子

<日 程>

- 8/23 先発4名 大阪→カトマンズ
- 1 8/30 本隊11名 成田→カトマンズ
大阪→カトマンズ
- 2 8/31 中国・ネパール国境越え→
樟木(ザンムー)(2,300m)
- 3 9/1 曲郷(チジャン)
- 4 9/2 ニエラム(3,800m)
- 5 9/3 ニエラム(3,800m)
- 6 9/4 シュガール(4,300m)
- 7 9/5
- 8 9/6 中国大本営(TBC)(4,960m)
- 9 9/7 TBC
- 10 9/8 TBC
- 11 9/9 中間キャンプ
- 12 9/10 BC(5,700m)
- 13 9/11 登山活動開始
}
- 32 9/30 第一次登頂予定
- 33 10/1 第二次登頂予定
- 34 10/2 BC下山
- 35 10/3 予備日・清掃活動
- 36 10/4 " "
- 37 10/5 " "
- 38 10/6 " "
- 39 10/7 中国大本営(TBC)
- 40 10/8 (A斑)日喀則 (B斑)ザンムー
- 41 10/9 ラサ カトマンズ
- 42 10/10 ラサ カトマンズ
- 43 10/11 成都 成田
- 44 10/12 北京
- 45 10/13 成田



マカルー登山隊1992

登山隊名称

雪豹クラブマカルー登山隊1992
 YUKIHYOU CLUB JAPAN MAKALU EXPEDITION 1992

目的 北西稜からのマカルー峰(8,463m)の登頂
 期 間 1992年8月上旬～11月中旬

参加予定者 岡田貞夫、村口徳行、その他数名

- 基本的事項
1. トレーニングは各自の目標をもって行う
 2. 個人の都合、価値感などを優先する
 3. 合宿形態の山行は行わない
 4. 参加者は自らの意志で登山活動を行うことを原則とし、従ってすべての責任は個人に帰する
 5. 隊長、チームリーダーの指示に協力し、全員が登頂できる態勢をつくる

昨年12月ネパール政府観光省登山局から「1992年ポストモンスーン季マカルー北西稜遠征仮許可証」が発行された。1991年分登山料(US\$2,340)の支払いを終え、今後1992年の登山料値上げ分を払い込むことで実質的な手続きを完了する。

現在、登山のタクティクスと同時に、出発までの時間を有効に使うための日程を組み、調整中。1年後のマカルーの頂上を目指し、目下トレーニング中である。

原稿募集

■「会報」では、皆様の投稿をお待ちしています。国内、海外、登山、紀行を問わず、身近な話題や、最新情報、評論、随想などフリーなテーマで結構です。字数の制限は特にありません。写真、地図、カットなど必要に応じて添付してください。

■また編集に関してのご意見、ご希望などありましたら編集部までぜひご一報願います。

■「会報」は自由な発想の場を提供できるものでありたいと思います。

■なお、原稿締切は4月30日とさせていただきます。次回会報30号は、1992年6月を目標に作製したいと思いますので、ご協力よろしくお願い致します。
原稿送り先 〒115 東京都北区志茂4-37-2 TEL03-3901-5412 原田雅子宛

編集後記

■以前、松田先輩より『日大山岳部創部当時の事を初見先輩に書いて戴いては』というお手紙を頂きました。原稿をお願いをしようとしていた矢先の事故で、それどころではなくなってしまいました。追悼文で石坂先輩が創部当時の事にふれて下さったのは、せめてもの慰めかと思います。

■長い間、部長をお引き受け下さいました沼尻先生、ありがとうございます。今後ともよろしく願ひ致します。 1991年8月 原田雅子

■皆様のご協力により会報29号を発行することができました。お礼申し上げます。また28号に引き続き、学生の記録を丁寧に校正してくれた山本修OBには感謝しております。

■次号は、パミール登山隊1991、チョー・オユー登山隊1991の報告を予定しています。 1991年8月 村口徳行

■会報29号編集委員 岡田貞夫／村口徳行／原田雅子

会報 第29号

発行日 1991年9月10日

発行人 中 嶋 啓

編集人 村 口 徳 行／原 田 雅 子

発行所 日本大学保健体育審議会山岳部

桜 門 山 岳 会

〒102 東京都千代田区九段南4-8-24 / (部室TEL)03-3329-5725

製 作 (有)オフィス・エム

〒201 東京都柏江市和泉本町1-2-12 3-D TEL03-3430-4076

印刷所 豊文社印刷(株)

〒201 東京都柏江市岩戸北3-11-12 TEL03-3489-0576(代)

古野淳